

神秘の蝶を追って…

ピカソの有名な絵のモチーフとなったスペイン北部の小さな田舎町ゲルニカにゆくと、町の真ん中にある広場からなだらかな坂をあがりきった高台に散策に適した緑溢れる公園がある。去年の四月二十六日の午後、春のおだやかな日差しを浴びながら、私はその公園のベンチにすわって本を読んでいた。以前メキシコのティファナの書店で買った、スペイン語で書かれている南米の短編小説集だ。

少し遠くには、老夫婦が談笑しながら公園を歩いているのがみえる。その左手さらに奥には、父親が乳児をのせたベビーカーをおしている三世代家族が、四、五歳の娘を中心にして楽しそうに歩いているのもみえる。中年の太った女性が連れの年老いた男性に『今日は本当にのどかね』とスペイン語で言っているのを通り過ぎていった。

気がつくとは、近くでは二十歳になったばかりかとおもわれる若い母親が、かがみこんで小さな男の子と、バスク語でたわいもない会話をしている。

（皺の深い老人達ではなく、こんな年端もいかない子がバスク語をしゃべっているなんて…）

私がふたりと直接言葉を交わしたわけではない。しかし、この母と子の語らいをきいているだけで、人が自分達の文化、特に言語というものを静かに守って生きているのだなというのを、そのとき深く感じた。今までさまざまな国を旅してきたが、何故かこの場面がかずかずの旅のなかでも私の一番印象に残っている。

バスク語というのは、どの言語体系にも属さない世界で他に似ている言語がないともいわれている稀少言語である。フランコ總統がスペイン全土を支配した時代には、バスクという民族とともに彼らの話す言語も弾圧され、バスク語を話す人口が、フランコが独裁者として君臨した四十年近くのあいだに激減した。今から六十七年前の一九三七年四月二十六日、内戦のさなか、フランコの要請をうけたナチスドイツの空爆によって徹底的に破壊尽くされたゲルニカは、その弾圧の象徴だ。ピカソは空襲をうけているゲルニカの光景を、闘牛の雄牛と瀕死の馬、死んだ子供を抱えた母親などに象徴させてモノトーンの抽象画として描いている。そして、一九七五年の民主化後もスペイン各地から豊かなバスクをめざして移住して来る人達に囲まれ、ゲルニカからバスで四、五十分ほどのところにあるバスク最大の都市ビルバオでも話されている言葉はスペイン語ばかりである。めったに彼らの固有言語であるバスク語をきく機会はないのだ。

旅をするということは、人々と触れあうことである。と同時に言葉とも触れあうことだと実感する瞬間であった。

南米を中心とした海外旅行好きで、ここ一年半はほとんど無職と言ってもいい中年フリーアルバイターの私の朝は、いつもこんなものおもしろいから始まる。

起き上がり洗面所で歯を磨くと、Mac OSX Panther がインストールされたiBook G4 を起動させ、早速メールをチェックする。エリックから英語でメールがはいってきた。

『スーザンが一昨日、私と大喧嘩したあと日本へゆくと行って家を出たきり帰ってこない。知ってのとおり、こういったことは彼女にはよくあることなのだが、今回は少し事情が深刻だ。』

スーザンは半年前から日本で働き始めた友人のショーンを訪ねて日本に行ったとおもわれるのだが、今日そのショーンから私のところにメールがはいり、「スーザンから東京に来るとのメールをもらったが、私は今、出張でシンガポールのに来ているので、しばらく日本には帰れない。それでその旨返信を送ったのだが彼女から返事がない。彼女のホットメールのアドレスを私はきいていないので、念のためあなた宛にメールを送る。折り返し彼女のホットメールのアドレスをおしえてほしい」と書かれていた。

ショーンが日本にいないとなると、今、頼りにできるのは昨年モロッコで知り合ったあなただけだ。日本にはショーンやあなた以外に知り合いはいない。もし、スーザンを偶然東京でみつけたら私があやまっていたと伝えてくれないだろうか。そして私に連絡をくれよう頼んでももらえないだろうか。スーザンはホットメールのアドレスを持っていないので、私から彼女へ連絡できる方法はないのだ。

私も来週には東京へゆく。今週は重要な仕事が一番大切な段階にはいつているので、どうしてもこっちにいないかなければならないのだ。

深刻だといった事情については、私が東京に行ってからあなたに話す』

エリックとスーザンは去年の五月、モロッコで出逢って長年の友人のように仲良くなったオーストラリア人夫婦だ。実際にはふたりとも移民で、エリックがスウェーデン出身、スーザンがイギリス出身だ。

ホットメールとは、自分のコンピュータを持ち歩かなくても、インターネット・カフェなどを利用してホットメールのホームページ ([www.hotmail.com](http://www.hotmail.com)) にアクセスし、自分のアカウント名とパスワードを入力すれば、簡単にメールのやり取りができる非常に便利なサービスのことである。このため旅先でも、日本をはじめとして世界各地にいる友人・知人とネット上で連絡をとりあうことができるので、私のようにバックパックを背負い長期にわたって海外を個人旅行する者（バックパッカー）達にとっては、ありがたいサービスなのだ。

一昨年の暮れ、三十代初めから十五年以上勤務した外資系の会社が、アメリ

カの親会社の都合でライバル企業に買収されたためリストラクチャリングがあり、将来的にフリーのライター、できれば時代劇の小説家をめざしたいと考えていた私は希望退職に応募し、一月末付けで会社をやめ、二月の初め年来の願望だった長期旅行にでた。

まず、トルコのイスタンブールにゆき久し振りにイスラムの雰囲気にひたり、現地の友人達と旧交をあたためたあと、雪景色のブラン城（ドラキュラの城）とおもちゃ箱のような町ブラショフがよかったルーマニア、路面電車でのんびり街めぐりをしたオーストリアのウィーン、世界一ビールが美味しい国チェコをへて、三月下旬、長距離バスで一気にスペインにむかった。東欧はチェコの首都プラハをはじめとして、路面電車が街の景色に溶け込んでいる。ルーマニアには私の世代には懐かしいトロリーバスまであった。そしてウィーンには改札がなかった。人が信頼されているのだ。

スペインは中国やインドと同じく多言語国家だ。共通語であるカステイリヤ語の他に、カタルーニャ語、ガリシア語とバスク語がしゃべられている。私達が現在スペイン語とよんでいる言語は、夫のアラゴン国王フェルナンドとともにスペインを統一し、一四九二年には、イスラム教徒をイベリア半島から追い出してレコンキスタを完成させたイサベル女王の国カステイリヤの言葉なのである。

カタルーニャ語とガリシア語は、稀少言語であるバスク語とはまったく違い、スペイン語と同様にラテン語を祖先とし、スペイン語に近い言葉だ。特にガリシア語はスペイン語とよく似ている。スペイン語以外の言語がしゃべられている地域はすべてスペイン北部にあり、西の大西洋から東の地中海にむかって、ガリシア地方、バスク地方そしてスペイン第二の都市バルセロナがあるカタルーニャ地方となっている。

ポルトガルの真上にあるガリシア地方には、サンティアゴ巡礼の道（Camino de Santiago）の最終地点であるサンティアゴ・デ・コンポステーラという都市がある。私はそこを起点にしてリーガ・エスパニョーラのサッカー（Fútbol）の試合観戦を中心に、ビーゴ、レオン、ブルゴス、サンタンデル、ビトリア、ビルバオ、ゲルニカなど、ガリシア語やバスク語が話されている地域が存在するスペイン北西部や北中部をまわった。レオンやブルゴスではキリスト教の聖週間（Semana Santa）にちようどぶつかり、日が暮れてからおこなわれる復活祭のパレードを目の前でみた。ただ、パレードに参加した人達の着ていた衣装は、クー・クラックス・クラン（KKK）の装束にそっくりでびっくりさせられた。

そしてスペインではめずらしく路面電車のあるビルバオから首都マドリを経

由して南下し、フラメンコ発祥の地で、アラブの迷宮のような旧市街があるカデイスでイスラムの匂いにふたたび触れたあと、五月の初め、スペインのアルヘシラスから船で地中海を越え、早朝、モロッコのタンジェに渡った。私にとっては初めてのアフリカ渡航であった。

港町タンジェは旅慣れた友人達にいわせると世界でも有数の悪徳客引きの多い町で、「港で船を降りてからバスで町の外へでるまで絶対に気を抜くな」とおどかさされていたのだが、意外なことに、おそろおそろ船から降りてもあたりにはそれらしき男達はおらず、歩いて町中にはいつでも客引きはまったく寄つてこず静かなものだった。道に迷った私は途中からタクシーに乗りタンジェのバス発着所にゆき、よくしゃべる乗務員や人懐っこいお客にかこまれ、エアコンのない民営バスを乗り継ぎ、背景の山々が美しく、坂の多い白い家々の町シヤウエンに着いた。

ちようどスペインの連休とかさなったため、スペインに近いモロッコ北部の山岳地帯にある町シヤウエンには、かなりのスペイン人がいた。よく南米を旅している私はスペイン語に接するチャンス逃すまいと、宿、茶屋、食堂で出逢うスペイン人に、ミントティーを片手に手当り次第に声をかけていった。ちなみに、イスラム教国のモロッコではアルコールが禁止されているためビールを飲むことができない。かわりにミントティーを飲むのである。

数日後フェズに行くためバックパックをかついで急な丘をくだり、バスの発着所がわりになつてゐる広い空き地にある茶屋でミントティーを飲みながらバスの到着を待っていた私に、「¿Habla inglés? (英語をしゃべれますか)」とスペイン語できいてきた洒落っ気のある、背の高い端正な顔立ちの西洋人がいた。それがエリックだった。彼の横にたたずんでいた女性の存在に、私はすぐ気がついた。スーザンである。私が「Si (イエス)」とエリックに答えると、

『スペイン語が上手いんだね』と彼が英語できいてきた。

『南米が好きでよく行ってるんですよ』と私も英語で答えた。『でも旅行に必要な程度しか話せません。しかし何で私がスペイン語をしゃべれるのを知ってるんですか』

『あなたはシヤウエンでは有名人だったんですよ、スペイン語でのべつまくなしに話しかけている日本人がいるって』

(シヤウエンっておもったより小さな町なんだな) 私は少し恥ずかしくなりました。

『恥ずかしがることはない。いいことです。私もスペイン語がしゃべれるのだつたらそうしています。ところで、南米のどこに行ったことがあるのですか』

『まず、コロンビア…』

『恐くはなかったですか』

『友人がいるので行っただけですが、常にふたりで行動するようにしていたので大丈夫でした』

『お友達は日本人ですか、それともコロンビア人ですか』

『日本人です。彼は旅行関係の仕事で一旗揚げようとスペイン語を学びコロンビアにでてゆきました。老後は日本にもどって暮らしたいと言っています』

『そうでしたか。その方はある意味私と同じですね』

『と申されますと…』

『私は今オーストラリア国籍ですが、元々はスウェーデンの生まれです。やりたいことがあり、それができるオーストラリアに移住しました』

『何をやりたかったのですか』

『観光産業にたずさわりたかったのです。スウェーデン人にとってオーストラリアは海外旅行の人気スポットのひとつなのです』

『なるほど』

『あとはどこに行かれたのですか』

『マチュピチュとチチカカ湖に行きたかったのでペルーとボリビア…、アンヘルの滝（エンジェル・フォール）とイグアスの滝、それにサッカーをみるために何度かブエノス・アイレスに行ったことがあります』

『サッカーが好きなんですか』

『好きですね。特に、アルゼンチンとスペインのサッカーが好きです』

『ボカとリーベルはどっちが好きですか』

『ボカですね』

ボカ・ジュニオールズとリーベル・プレートはリーガ・アルヘンティーナの二強で強烈なライバル関係にある。本拠地はどちらも首都のブエノス・アイレスにあり、ボカ・ジュニオールズは労働者階級のチーム、リーベル・プレートはエリート階級のチームといわれている。アルゼンチンが生んだスーパースター、デイエゴ・マラドーナはボカ出身のプレーヤーだ。

『ボンボネラには行きましたか』

『行きました。町もスタジアムもギラついていて恐かったけれど』

『……』

ボンボネラとはボカ・ジュニオールズの本拠地スタジアムのことで、サポーターが熱しやすく、激しやすいことで知られている。場所はボカ（La Boca／スペイン語で「ロ」という意味）地区という治安の悪いところにある。この地区にはカラフルにペイントされた家々が立ち並んでいる。スタジアムの近くには、カミニート（Caminito／スペイン語で「小径」という意味）とよばれる有

名なタンゴから名前がとられた散歩道やリアチュウエロという油が浮き、公害に汚染された大きな運河がある。

私がボンボネラに行くため、バスを降りてボカ地区を早足で歩いていると、路地裏のあちこちで少年達がストリート・サッカーに興じていた。

ボンボネラにはいると試合開始前からエキサイトした男達が歌を歌い騒いでいた。私がみた試合はリーベル・プレートとのスーペル・クラシコではなかったが、試合が始まるとすぐ発煙筒がたかれ、紙吹雪がまかれて、場内はまたたくまに異様なムードにつつまれた。

（これがアルゼンチンのサッカーか…、熱い熱すぎる。スペインのサッカーがおとなしくみえてしまう）

経済事情の悪いアルゼンチンでは、トッププレイヤー達は大きなお金と最高のレベルでの活躍の場をもとめてみんなヨーロッパに行ってしまう。だから国内に残っているのは若手か出戻りのベテランばかりだ。そんな二十歳にもならない若者達が、「いつか俺も」と頂上をめざして争う試合は、ちよつとした戦争だ。彼ら戦士達のしなやかな獣のような動き、荒削りなスライディング・タックルそして激しいぶつかり合いに場内はどつとわき、そのたびに観客の身体が左右に大きくふれた。三層からなる急勾配のスタンドのほぼ最上段で観戦していた私には、それはまるで大海原にざわめく大波、小波のように感じられた。

『それとゴールが決まったとき、スタジアムを埋め尽くした大観衆の興奮が頂点に達し、彼らのウオーという怒号とともにスタジアム自体がゆれるのです。

一瞬スタジアムが壊れるかとおもった。本当に人のエネルギーって凄いですね。生きているって素晴らしいと心の底からおもいました』

エリックはいい笑顔をみせ、そして言った。

『私達も来年には南米に行きたいので、道々南米のよさについておしえてください』

こうして、エリック、スーザンそして私の三人がエル・フナ広場の熱気が素晴らしかったマラケシュまで約一週間行動をとにした、この長期旅行のなかでも一番のハイライトとなった旅が始まったのであった。

（東京で偶然逢ったら、と言われてもどうしたらいいのだ）私はエリックからのメールをみつめていた。

夜は六本木の外国人が多いバーで網をはるにしても、昼間はどこにいろのだから。東京タワーだろうか、それとも…。こればかりはエリックにきかないと彼女の立ち回りそうな先は私にはわからない。それにどこに宿をとるのだろうか。旅館だろうか、外人ハウスだろうか。それもきいてみないと。私と同じバックパッカーである彼らのことだからパークハイアットのような高級ホテルに

は泊まらないだろうが。

それに、スーザンが東京にいるとは限らない。私が外国人だったらまず京都に行ってみる。それに全国の有名なお寺もめぐってみたい。

まずは、「Lonely Planet/Tokyo (ロンリープラネット・東京)」を買わないといけないかな。彼らふたりはいつも旅先では世界中のバックパッカー御用達のガイドブック「Lonely Planet (ロンリープラネット)」を持ち歩いていたのだから。

注：「」で囲った洋書は翻訳がでないものを、『』で囲った洋書は翻訳がでているものを示しています。(二〇〇五年五月時点)

待姿の高橋英樹の顔が表紙いっぱいに写っている「Lonely Planet/Tokyo」を、私は新宿の紀伊国屋書店で買った。高橋英樹のフォトグラフといっても、実際には屋外のジャイアント・スクリーンTVに映った姿で、その目の前で作業服姿とネクタイ姿の男性ふたりが、箱から何かをとりだしかがみこんでTVの修理作業をおこなっていた。

携帯電話の待受画面は、曜日は日曜日、時刻はちょうど午後一時を示していた。

(まずはどこに行こうか)

雲ひとつない五月の暖かく気持ちのよい日差しの中、新宿三丁目の「STARBUCKS COFFEE」の屋外のテーブルにすわっていた私は、パラパラと「Lonely Planet/Tokyo」をめくりながら考えていた。突然、隣の席にいたヘビースモーカーの若い女性のたばこの煙にむせてしまった。店内禁煙の「STARBUCKS COFFEE」も屋外のテーブル席では喫煙ができるのを忘れていた。

東京メトロの新宿三丁目駅で丸ノ内線に乗りまず赤坂見附駅にゆき、そこで銀座線に乗り換え浅草に行った。

雷門をくぐり仲見世や浅草寺の境内を歩いてみる。歩いている外国人の数はおもっていたより多いが、スーザンらしき人は、もちろんいない。

私が海外旅行でたずねる街は、国際線が発着する大都市でなければほとんどが歩いてまわれるほどの大きさだが、東京は二十三区だけで八百万人がいる大都市である。あてもなく歩きまわったところでそう簡単にみつかるわけがないのである。

一杯飲み屋が軒を連ねているところを歩いてみる。どの店もテレビをつけ競馬中継を流している。天気もいいせいかな昼間から飲んでいる人は多い。歩き疲れた私もすぐ彼らの仲間にくわる。競馬に興味はなく、知っている人もいな



私は、バックパックからペーパーバックをとりだし、焼き鳥と生ビールを片手にひとり本を読むことにする。ヒラリー・ロッドム・クリントンの『リビング・ヒストリー (Living History)』だ。少し前に読んだポール・オースターの『ニューヨーク・トリロジー (The New York Trilogy)』の英語にくらべると、小説ではないせいかなり取っ付き易い。

(しかし、おかしいぞ、『リビング・ヒストリー』を買った覚えはないし、ペーパーバック版はまだでていなかったはずだが…)

金色のうんこのオブジェで有名な、某麦酒会社が所有するビルの対岸にある波止場から、水上バスに乗り浅草をはなれ、いにしえの徳川將軍のように隅田川をくだり浜離宮に着いた私は、歩いて汐留シオサイトに行った。ちなみにこのユニークなオブジェは、それを説明したホームページには、「燃え盛る魂(火の玉)」をイメージしたものであると書かれている。

どんないわれがあるにしろ、私はこのオブジェがわけもなく好きである。

日テレタワーのところにある「Tully's Coffee」でアイスカフェラテを飲みながら、大道芸人達の技をしばらく眺めていた。シオサイトに来たのは久しぶりだが、土日にここらあたりを歩いているといつも何かやっている。

(イスラムのテロリスト達が襲撃するしたら、ここか六本木ヒルズだろうな) とぼんやりおもう。

昔、ソ連映画「惑星ソラリス」では未来都市のイメージ映像として東京の首都高速の風景をつかったときいたことがあるが、現在ではまさにこの汐留シオサイトの超高層ビル群が未来都市のイメージにもっとも近いのだろう。

少しのあいだあてもなく歩いていると、五十メートルほど先の都営地下鉄の出入り口のそばに見覚えのある女性がいた。あれは間違いなくスーザンだ。

「スーザン」と大声をだし私は走った。自動改札機のところに来るとすでに彼女はいない。急いで切符を買い、ホームに降りる。しかし、両線とも電車がでた直後でホームにはすでに人はほとんどいなかった。

そこで、私は夢から覚めた。

昨日の深夜、いや正確には今日の早朝、スカパーでMLBの中継をみていてほとんど寝ていないのだから、朝起きてすぐコンピュータをつけたところで、だらだらと横になり布団のうえでまどろんでしまうのは仕方のないことだ。

少しまたうとうとしていたら座卓のうえの置時計はすでに午後二時近くを示していた。今日は土曜日だ。シャワーを浴びてから、外に出た。雨を含んだような低い雲が、速い勢いで南南西から北北東に流れてゆく。夜には雨が降るのだろうか。私はどこにも寄り道せず直接汐留シオサイトに行った。

夕闇がせまるまでの四時間あまりシオサイトで網を張ったが、スーザンの姿

は影もかたちもなかった。

（そりやそうだ。夢のなかでは日曜日だったはずだ。それに、今日とは違い雲ひとつない快晴だった）

私は少し人気がなくなり始めた汐留シオサイトの日テレ広場をみていた。

（去年旅をしたスペインだと、逆に町の広場をめざしてぞくぞくと人が集まってくる時間だな）とおもう。

日が西に傾くと、町にはこんなに人がいたのかとおもわれるほど、広場に人が集まり始まる。広場のあちこちで老人達がベンチに陣取って話しをしている。男の子達が元気にサッカーに興じている。母親に連れられて広場にやってきた幼い子達が、母親達のおしゃべりをよそによちよちと歩きまわっている。恋人達がキスをしながら甘い会話をかわしている。広場に隣接したバルでは男達がビールやワインを片手に口泡を飛ばして何かを話している。スペインには広場の語らいがある。広場の文化があるのだ。

日本でも東京が江戸とよばれた時代には女達には井戸端の語らいが、男達には風呂屋の二階の語らいがあった。大火の多かった江戸には徳川幕府の命で、火除け地として広小路とよばれる幅の広い街路が要所に設けられた。そんな空間を当時の日本人が放っておくわけがない。人が先か物が先かはわからないが、広小路にはいつしかさまざまな人が集まり始め、当初の幕府の意図に反し、床見世、水茶屋、見世物小屋などが密集する江戸屈指の繁華街となった。そしてその広小路から町人文化が花開いた。

スペインの広場に床見世とよばれた露店や見世物小屋はない。屋外の席で食事したりワインを飲んだりするのはヨーロッパの人々の素敵な習慣だと私はおもうのだが、広場の周辺の店が屋外にテール席をだすほかは、広いスペースとベンチ、それに人々の語らいがあるだけだ。

「Tully's Coffee」のとなりにある「benugo」の屋外のテラス席で、私はビールを飲みながら考え事を始めていた。どうやら雨は降りだしそうもない。

小説家志望？ エリックやスーザンなど海外旅行先で出逢った人達をふくめ、会う人にはいつもそう言っているが、（去年暮れに応募した短編の時代劇小説は一次予選にも通らなかったじゃないか）とおもう。

去年の六月下旬、五ヶ月におよぶ長期旅行から帰ってきた私は、長編時代劇小説の執筆にかかった。題材は元禄赤穂事件、つまり忠臣蔵である。しかし主人公は浅野家城代家老・大石内蔵助良雄ではなく、敵役の高家筆頭・吉良上野介義央（よしひさ）でもない。吉良上野介の孫で後継者の吉良左兵衛義周が物語の主役だ。吉良義周は元禄という戦（いくさ）のなくなった平和な時代に、高家として養父（祖父）の跡を継ぎ、まだ戦国のなごりが消えきっていない武士

道とその対極にある儀礼典礼の融合を志していたが、赤穂の牢人達の理不尽な暴力によつてその夢をたたれ無念のうち死をむかえる、というのがストーリーだ。

長編小説の執筆に並行して私は、十月にもうひとつ短編小説を書いた。新人賞で最終予選に通れば、文芸雑誌の編集者とコネができるときいたためだ。でも、その短編は一顧だにされなかった。

私は完全に暗くなつたあと、都営地下鉄・大江戸線の汐留駅にゆき、ホームにはいつてきた電車で急いで飛び乗った。座った席の目の前に、チャドルをかぶったアラブ系の女性達とその子供達がいた。

(そうだ、この前は面白い男に出逢った)

今週の初め、月曜日の午後七時、私は新宿の南口にいた。紀伊国屋書店でマイケル・ムーアの『アホでマヌケなアメリカ白人 (Stupid White Men)』とポール・オースターの『リヴァイアサン (Leviathan)』を買ってから、『Nottingham』新宿南口店にはいった。『ニューヨーク・トリロジー』のなかに収録されていた傑作『鍵のかかった部屋 (The Locked Room)』は、後事を「私」に託し妻子を残して失踪してしまつた幼友達の行方を追いかけた話したが、『リヴァイアサン』はみずから爆弾で吹き飛ばしてしまつた友人の人生の足跡をたどつたものだ。

「Nottingham (ノッティンガム)」というのは、全国にチェーン展開している英国風パブで六本木に本店がある。このパブを運営している会社の社長が学生時代に留学した町の名前にちなんで命名された。ノッティンガムはイギリス中部の美しい田舎町で、ロビン・フッドの伝説で有名である。その六本木店が二十年以上も前から私の友人グループの待ち合わせ場所となつていたのである。六本木店がCOD (キャッシュ・オン・デリバリー) の店なのに、この新宿南口店は日本の居酒屋と同じで後払いシステムなのが、面白い。CODというシステムに、六本木という外国人客の多い地域の特徴がよくでている。この店も六本木店ほどではないにしろ、比較的外国人の多い店だ。

カウンター席で買ったばかりの『アホでマヌケなアメリカ白人』を読んでいたら、アラブ系とおもわれる三十台後半のカジュアルな服を着ている男性が、流暢な英語で声をかけてきた。

『何を読んでいるのですか』

私は本を彼に渡した。彼は本の裏表紙をみていた。

「あなたは日本人ですよ」今度は日本語できいてきた。

彼の日本語は日本人のアクセントとは微妙に違うが、かなり上手い日本語だ。

「日本人です。何故そうきかれたのですか」

「最初お顔をみたとき、中国の方のようにもおもわれたので…。それに英語の本を読んでいた。最近、日本語で話しかけても韓国の人や中国の人だったということが多いのです」

「そうですか。でも、中国語の本は読んでなかったでしょう」

「……」

「まあ、顔が中国人に似ているとよく言われますが」

「この本、面白いですか」

「おもったより難しい」

「……」

「おもったより難しいです」

「何て言ったの」

『おもったより難しいです』私は英語に切り替えた。『英語で話しましょう』

「いいえ、日本語でいいです。ここは日本ですから。難しいのは英語がですか、それとも内容がですか」

「両方です」

「両方ですか」

「そうです」

「ジョージ・ブッシュについてはどうおもわれますか」

「どうしてそんなことを突然きかれるのですか」

「彼をコケにしたマイケル・ムーアの本を真剣に読んでらっしゃったものですか」

「なるほど」

「……」

「嫌いですね」

「では、アメリカについてはどうおもわれます」

「……」

「お話しになりたくなければ、話されなくても結構です」

私は言ってしまったかどうか迷ったが、

「あまり好きではありません」とおもいきって言ってみた。

「どうですか」

「自分の利益しか考えていない」

「そうですね。アメリカ人はお嫌いですか」

「アメリカに行ったことがないので何ともわかりませんが、こちらであつたアメリカ人はみんないい人です。ただ、日本人以上に仕事中毒のような気がしま

す」

「仕事中毒…、ですか」

「はい」

「……」

「アラブの国から来た方とお見受けしますが、アラブの国々ではイラクで今起こっていることをテロとは考えていないのでしょうか」

「どうしてそうおもわれるのですか」

「どうしてって、あれはアメリカによるイラク侵略ではないですか」

「失礼ですが、私はアメリカ人です」

私はしまった、とおもった。

「大丈夫ですよ。アラブ系アメリカ人なのは事実ですから」彼は微笑んだ。

「そうですか。つかぬことをお伺いしますが、ムスリムでらっしゃるのですか」

「ムスリムです」

「メッカのカーバー神殿には行かれたことがありますか」

「あります」

「どんなところですか」

「とても言葉では説明できません。しいて言えば神の存在を実感する場所と云うことができるとおもいます」

「……」

「日本で神の存在を実感できる場所がありますか」

「あなたは日本の三大霊場とよばれるところに行かれたことはありますか」

「高野山はまだですが、比叡山と恐山なら行ったことがあります」

「比叡山はどんな風に感じられました」

「緑の深いところだとおもいました」

「それだけですか」

彼は苦笑いした。

「私は日本の神聖な場所に興味があります」

（どういうことだ）

「あなたは屋久島には行かれたことがありますか」と彼がきいてきた。

「いいえ」

「日本の精霊達の住処として、屋久島ほどふさわしいところはないと感じました」

「ほほう（宮崎駿のアニメーション映画の見過ぎじゃないのか）」

「ところで、日本は四季があつて美しい国でしょうと多くの日本人から自慢されるのですが、あなた自身もそうおもわれますか」

「かつては、というのが私の考えです」

「という」と

「昔の日本は美しい国だったとおもいます。田舎にいけばまだ美しかった部分がかかり残されているとおもいますが、東京の惨状をみてください。美しさより機能を優先させてしまった。東京オリンピックのときに建設された高速道路がその象徴でしょう。江戸時代の日本橋は美しかったときいています。それが今は無惨にも、その上に高速道路がはしっています」

「……」

江戸とよばれていた時代の東京は、英語でスカイスクレイパーとよばれる超々高層ビルの林立する現在の姿からは想像もつかないが、緑に溢れていた美しい都市で、物の再利用などエコロジー感覚にもすぐれていた。しかも街のなかには川や掘割が編み目のように張りめぐらされていて、イタリアのベニスのような水の都（みやこ）だった。江戸の物資はこの水をつうじて運ばれた。首都高速道路の多くは、今ではほとんど埋め立てられてしまったが、百五十年前にはその川や掘割が流れていたところに沿って、またはまだ残存している川や掘割のうえに、建てられているのである。

スカイスクレイパー (Skyscraper) とは天をこするものという意味で、日本語の摩天楼はここからきている。東京の超々高層ビル群は真夏には聳えたつストーブと化し、八月の東京をインドより暑くする。

「自分の国を悪く言う人はめずらしいですか」

「いえ、私も自分の国には複雑なおもいをもっていますから」

「……」

「田舎にいけばまだ美しかった部分がかなり残されているとおもいます、とあなたはおっしゃれましたが、地方は東京以上に自然破壊がすすんでいるというのをご存知ですか」

「いいえ」

「日本人であるあなたがご存じないとは……」彼はしばらく絶句していた。

「無駄な道路やダムが建設されているというのは知っていますが、それほどまで自然破壊がすすんでいるのですか」

「あなたがおもわれている以上にすすんでいます。沖縄の西表島のリゾート開発はご存知ですか」

「いいえ」

「一部の週刊誌にも載ったはずですが」

「……」

「だから屋久島だっていっどうなるかわからない」

(結構しつこい男だな)

「いやな外国人、変な外国人とおもわないでくださいね」

「おもいません」

「よかった。私には、父の祖国パレスティナをおもう心と母が生まれ育ったアメリカにたいする複雑な気持ちが入り交じっています。私は生まれも育ちもアメリカです。母はジャーナリストとしてイスラエルにきて父と愛し合ったそうです。父はパレスティナの闘士だったそうです。宗教が違うから結婚はできません。そのうち戦火がひろがり父は母に別れを告げて戦場にむかい、母は私をみごもったこともあり、いったんアメリカに帰りました」

「ディープな話しですね」

「日本にいとそう感じられるのでしょうかね」

「……」

「母はその後、父がどうなったか知らないそうです。何度もパレスティナをたずね、いろいろなつてをたどって聞き回ったとのことですが」

「おふたりはどうして知り合ったのですか」

「父が母の危機を救ったのが知り合うきっかけだったそうです」

「そうですか。何故お母様の宗教であるキリスト教ではなく、お父様の宗教であるイスラム教を選択されたのですか。さしつかえなければ、おきかせください」

「父の祖国の惨状ですね。アメリカ人である母も嘆いていました」

「……」

「できればお聞かせ願いたいのですが、イスラエルはどうおもわれます」

「……」

「おっしゃりたくなければ、ノーコメントで結構です」

私はしばらく考えてから言った。

「申し訳ありませんが、ノーコメントです」

「わかりました」

「ご職業は何ですか」

「母と同じジャーナリストです」

「お母様のご意志をつがれたわけですね」

「そうなりますね」

「それでは何故中東ではなく日本にこられたのですか」

「母の再婚相手が、日本人だったからです」

「なるほど。それでは、今、お母様やお義父様と一緒に日本に住まわれているのですか」

「いえ、日本の会社のアメリカ法人の重役として活躍していた義父が、リタイアして母と一緒に母の故郷であるデンバーに移り住みましたので、弟や妹も今そちらにいます」

「そうですか」

「あなたは何を今やってらっしゃるのですか」

「小説家を志望しているのですが、なかなか上手くゆかなくて……」

彼はモハメッドと名乗った。私とモハメッドは携帯電話の番号とメールアドレスを交換した。

（谷口にできるだけ早くモハメッドを紹介しなければならないな）

大江戸線の国立競技場駅にもどってきた私は、地上にでると早速、親友の谷口優一の携帯電話にメールをいれた。

「今夜はいつものように、ノッティンガムに十時半でいいかい？」

このノッティンガムとはもちろん「Nottingham」六本木本店のことである。

この英国風のパブが、二十年以上前から私の友人グループの待ち合わせ場所となっているのは、すでに述べた。

谷口優一は主夫である。

といっても専業主夫ではなく、フリーランスの翻訳者兼主夫である。彼の十歳年下の妻、坂口泰子さんが実業家として大成功をおさめ、そのお陰もあり、谷口と泰子さんはまだ幼いふたりの子供とともに六本木ヒルズレジデンスに住んでいる。子育ても彼の担当だ。平日、朝、彼は保育園に子供ふたりをつれてゆき、夕方、引き取る。日曜日は一日中子供達の相手をしている。翻訳の仕事は平日の日に手がけている、と彼は言っていた。彼が自分だけの完全な自由な時間をとれるのは、夜、泰子さんが仕事から帰ってきて子供達を寝かしつけてからだから、午後十時以降ということになる。

彼の妻にたいする唯一の不満は、彼女が家族の住まいとして六本木ヒルズレジデンスを選びそれを押し通したことだ。六本木の近くに住むことは、六本木を遊び場としている彼にとって都合のいいことなのだが、バックパッカーとはいいながら三つ星や四つ星のホテルにも宿をとってしまうこともある私と違い、根っからのバックパッカーで貧乏旅行者の彼には、六本木ヒルズレジデンスのような豪華な住まいは海外で超高級ホテルに泊まるようなもので、気に染まないことなのであった。

（谷口はローンじゃないと言っていたから、泰子さんが即金で購入したのだろうが……。彼女のような成功者ではない私には、縁のない話しだ）

その谷口の口癖は「フリーランスの翻訳者はもうからない」である。彼は元々



海外のミステリー小説が大好きで、結婚後フリーのジャーナリストをやめ海外ミステリー小説の翻訳者をめざしていたのだが、あるときそれに見切りをつけ、産業翻訳とよばれる分野の翻訳者になったのだ。「IT分野での翻訳ではかなり名の知れた翻訳者なのよ」と泰子さんは言っていた。

その谷口は今、アラビア語の勉強をやっている。元々中近東が好きでバックパックをかついでよく一人旅をしていたのだが、数年前シリアで面白い男と出逢いさらにイスラムの国々に興味を持つようになり、アラビア語の習得に熱心になった、と言っていた。少し前、スカパーでアルジャジーラの無料放送を一年間やっていたことがあり、それも彼の興味を引き立たせたようだ。今では毎日仕事を始める前にアラブの新聞のホームページをみに行くことが彼の日課となっている。

私が谷口と出逢ったのはもう二十五年以上前のことだ。彼はそのころ恵比寿の英会話喫茶「GENESIS」の常連だった。「genesis」とは旧約聖書の「創世記」という意味だ。外国人と英語で話すことができる場所がないかとさがしていた私が、知人からおしえてもらって行ったのが「GENESIS」で、年が近いことから自然と遊び仲間となった。

自宅にもどった私は、スカパーで午後七時からやっているMLBの再放送を途中までみたあと、バス・ルームにゆき今日二回目のシャワーを浴び外出の準備をした。服を着て、充電器にセットしてあった携帯電話を手にとると、谷口から「OKです」という返信メールがはいっていた。

雑居ビルの六階にある部屋をでて、エレベーターに乗り一階で降りた。私の住んでいるビルはほとんど小さな会社の事務所で占められ、実際に住んでいるのは八階の最上階に住んでいる大家をのぞくと三、四人もいないだろう。

しばらく歩くと、都営大江戸線の国立競技場駅の出入り口があり、またしばらく歩くと外苑東通りにぶつかった。今日はこのまま外苑東通りに沿って歩いて六本木に遊びに行く予定である。

明治記念館の前を通り過ぎると左手に東宮御所があった。この辺りは東京でもめずらしく緑が深い。都営北青山一丁目アパートを道路の反対側にみて、道に沿って左に右に蛇行すると、銀座線、半蔵門線と都営大江戸線が接続している青山一丁目駅の出入り口がみえてきた。少し遠くには六本木ヒルズの偉容もはつきりみえる。青山通りを渡り、青山ツインタワーとホンダ本社ビルのあいだをぬけ、左に九十度曲がり、すぐ右に九十度曲がりしばらくゆくと山王病院が左手にあった。前方には六本木ヒルズがふたたびその姿をあらわした。乃木神社を過ぎ、千代田線の乃木坂駅を過ぎたあたりで道は左に蛇行する。防衛庁跡地の前まで来ると、六本木の喧噪はもう目の前だ。

ここ四、五年急に多くなった風俗店の客引きのうるさい声を無視し歩き続ける。

（ここは歌舞伎町か！）と嘆きたくなる。

気がつくとき、首都高速道路の暑苦しい高架のかかった六本木交差点を渡って、ロアビルのそばまで来ていた。部屋をでてからまだ三十分ちよつとしか経過していない。ここまで来ると外国人の数も急に多くなる。

外苑東通りの飯倉の方角には、光り輝く東京タワーもおもったより近くにみえる。

東京タワーをしばらくながめてから、比較的幅のある真つ直ぐな階段をくだって地下一階におりた。身体を右に約九十度回転させて出入り口の前に立つと、ドアがだまって開いた。自動ドアだ。私は「Nottingham」六本木店のなかにはいった。携帯電話の待受画面をみると、時刻は午後十時を二十分ほど過ぎていた。日によって違うが、このパブは外国人の客で溢れている。価格が他の六本木のバーやパブよりかなり安いのがこの店の魅力であった。それでいて雰囲気は安っぽいということはない。店内の配色も濃い緑を基調としており、落ち着いたムードを醸し出している。

店は横長の長方形で、出入り口をはいつたすぐ右側のエリアには、つめれば十名から十二名程度の人が話すことができる、縦におかれた長方形のテーブルを中心に、それを囲むようにして壁際に、四人用の四角いテーブルが、十二時の方向から三時の方向に時計回りに、六つおかれている。これらのテーブルはパブ用で、そばに立って飲むこともできるように、通常のテーブルより背丈がかなり高い。人数分のスツールがそれぞれのテーブルにおかれている。このスツールに腰をかけたリまた立ったまま、仲間達と飲んだり語ったりするのである。

今度は左手をみてみる。自動ドアが開いてすぐ左側の奥、つまり店の真ん中に横に広がっているのはバー・カウンター席で、飲み物と食べ物のオーダーをする場所がバー・カウンターの左右の端近くに二ヶ所ある。バー・カウンターの前のスペースには、背の高いパブ用の円形のテーブルが三つおかれている。このエリアは立ち飲み専用で右側のエリアと違いスツールはおかれていない。欧米人はスツールにすわるより、立ったまま友人達と歓談するのが好きなようである。

そのさらに左手奥にある一角はレストラン・エリアとでもよんでよいのであろうか、四人用の四角い通常の高さのテーブル席が八席おかれていて、ここのエリアではゆっくり食事もできる。

レストラン・エリアの壁には五十インチの大きなプラズマTVがはめこまれ

ている。以前は液晶プロジェクターをつかい壁のスクリーンに映写していたのだが、半年前にプラズマTVに切り替わった。店内に設置してある他の六台のTVもそのときブラウン管式から液晶タイプのものにすべて切り替わった。

店内のTVに流れているのは、今週の水曜日におこなわれたUEFAカップ決勝戦の録画映像である。来週水曜日にはいよいよ欧州サッカー03/04シーズン最後のをかざるチャンピオンズ・リーグの決勝戦がある。

しばらくカウンターの前の立ち席でドラフト・ビールを飲みながら待っていると、谷口と一緒に石野高志がはいってきた。

石野は大学時代空手をやっていた友人で、谷口が大学時代トルコのイスタンブールに行ったとき現地で知り合い意気投合した。当時石野は大阪に本社がある印刷会社に勤めていて、その後東京に本社があるデザイン会社に転職した。谷口の紹介で彼と知り合ったのは、彼が東京にでてきてからだから、石野ともかれこれ十五年以上の付き合いになる。

谷口が泰子さんとの結婚後海外ミステリー小説の翻訳者をめざしフリーのジャーナリストをやめたとき、石野は私にこう言った。

「高橋、谷口にいったい何が起こったのだ。ジャーナリストは、あの男の人生そのものだったはずだ。後悔することにならなければよいが」

私達はいつものように、出入り口からみて右側のエリアの中心にある、十名から十二名用の縦におかれた大きな長方形のテーブルに陣取った。このテーブルには、二、三人のグループから八人程度のグループまでさまざまな国籍の人達が、入れかわり立ちかわりやってくる。

だからこの席に陣取ると、他のグループの人達に声をかけやすい。テーブル選びにもそれなりの理由があるのだ。

「谷口、月曜日に面白い男と知り合ったぞ」と私は言った。

「どんな男だ」

「三十代のアラブ系アメリカ人だ」

「アラビア語の勉強になるな。今度は是非紹介してくれよ」谷口の目が輝き始めた。

「もちろんだよ」

「で、どういう人なんだ」

「彼のお母さんがアメリカ人でジャーナリストとしてイスラエルに来て、パレステイナの闘士だった男性と知り合い彼をもうけたということだ。お母さんは戦時下であったこともありいつかその男性と離ればなれになり、そのうち彼をみごもったことがわかったので、彼を生むためにいったんアメリカに帰ったのだが、その後パレステイナにもどっていくら彼の父親をさがしても、その消息

はわからなかったとのことだ」

「そうか。日本で何をしている人なんだ」

「お母さんと同じジャーナリストということだ」

「ますますその男に興味がわいてきた」

「でも、アラブ系アメリカ人が日本にいてなんてめずらしいよね」

「九一一以降のアメリカにいらなくなったのかもしれないよ」と石野が言った。

「それは考えられる」と谷口が言った。「ブツシュ大統領はアラブ系アメリカ人にひどいことをしているからね」

「そうなのか」

「そうだ」

「ところで、結構いろいろなことをきかれたよ」

「どんなことをきかれた」

「ブツシュ大統領のこととか、アメリカ人をどうおもうかとか」

「ジャーナリストだったら日本人がどんなことを考えているのか興味があるかな」

「……」

「それで、正直に答えたのか」

「もちろん」

谷口はニコツと笑った。

「ほかに？」

「イスラエルのことはどうおもうかときかれたけど、それには答えなかった」

「何故だよ。自分の意見を言ういい機会じゃないか」

「初対面の人間に簡単に答えられる話しじゃないよ」

「旅先だったら常に一期一会なんだぞ。自分の意見を隠そうとしてしまったら、初対面の相手の考えはききだすこともできないじゃないか」

「……」

「高橋はいつもそうやって一歩踏み出さないから、何も得ることができないんだ」

「まあまあ」石野が仲裁にはいった。

「谷口、前に話したモロッコ旅行で知り合った夫婦だけど」私は話題をかえた。

「奥さんのほうが日本に来ているらしい……」

「らしい？」

「旦那のほうからメールがはいって、ワイフが日本に行っていると言うんだ」

「彼女のほうからはメールがはいってないのか」

「一緒に来るもんだとおもってたから旦那にしかおしえていない」

「そうか。じゃ、もしかしてふたりの仲に何かがあったのか」

「さすが、おまえも夫婦ものだな。まさにそのとおりらしい」

谷口は苦笑いした。

「で、高橋に何をしてほしいって言っているんだ」

「偶然東京でスーザンをみつけたら私に連絡をしてくれないか、とのことだ」

「それだけか」

「それだけだ」

「スーザンというのがパートナーの名前か」

「そうだ」

「雲をつかむような話しだな」

「まあな」

「ただ、東京で、夜、遊ぶなら、まず六本木だろうな」

「それでだ。われら六本木探偵団の出番というわけだ。彼女の写真を…」

私はふたりに持ってきたスーザンの写真を渡した。谷口と石野が顔を見合わせて苦笑いした。

「用意がいいな」石野が笑った。

「パソコンは便利なものだ。自分ですぐ印刷できる」

「透き徹った目をしている女性だな。髪型が『ゴースト (Ghost)』のデミ・ムーアに似ている」映画好きの石野が写真をみていた。

「感情の起伏が激しい人だ。『美しき諍い女 (La Belle Noisuse)』のエマニエル・ベアールを想像してくれればいい」

「そうか。顔はどちらにもあまり似ていないけれど」

「それでも綺麗な人だろう」

「そりやそうだろう。髪の毛が長ければ…、この写真のような雰囲気を持った女性は間違いなくおまえの好みだからな」

「友達の女房だ。バカなことを言うな」私は石野をにらみつけた。

「で、高橋は私と石野に何をしてほしいのだ」と谷口が言った。

「もし私と一緒にじゃないときに彼女をみつけたら、何気に彼女に声をかけ仲良くなつてほしい。できれば路上でなく彼女がどこかの店、スタバでもいいけれど、はいつたとき偶然をよそおって声をかけてほしい」

「それで」

「もし彼女と話ができる状況になったら、話を上手くモロッコの話に持つて行ってくれないか。モロッコでどんなことがあったかは、去年何回もきているだろう。それにふたりともモロッコに行ったことがあるのだし」

「ああ」

「モロッコの話して盛り上がったら上手く話をあわせて、現地で知り合った日本人がもしかしたら自分達の親友かもしれない、ということをおおわしてほしい」

「そう上手くいくかな」

「いくよ、おまえらなら。秘密兵器もあるし。問題は上手くナンパできるかどうかのほうだ」

「それなら問題がない。二十台後半、われわれは六本木でナンパをたくさん成功させたのを忘れたか。外国人の女性に話しかけるなんてそれにくらべればちよろいはずだ」

「そうだったな」

「それより秘密兵器って何だ」

「インターネットだ。話しがのってきたら携帯電話で私のホームページにアクセスして、彼女も写っている私のモロッコ旅行の写真と私達がみんなで行った旅行の写真をみせてほしい」

「わかった。そのURLを私の携帯電話に送っておいてくれ」

「OK」

「ところで、彼女は何故日本に来たんだ。高橋がいるからというわけでもないようだし」

「シヨーンという友達をたよって来たらしい。しかしその人が海外出張にでていて日本にいないのであてがはずれたようだ」

「シヨーンか」と石野が言った。「シヨーン・コネリーという有名な俳優がいるし、シヨーン・ヤングという『ブレードランナー (Blade Runner)』という映画にでた女優もいる。男性なのかな、それとも女性なのか…、名前からじゃわからないな」

シヨーンという名前は、日本人では千春、操、ひろみという男性にでも女性にでも通用する名前にでもあたるのだろうか、石野の言うとおり名前だけではわれわれには性別はわからない。

「その人のアパートメントに泊めてもらうつもりだったらしいから、女性だろう」

「外国人はわからないぞ。恋人でもない男女でも部屋をシェアすることがあるからな。それに彼女の前の彼氏かもしれないし」石野が複雑な表情をした。

「そうか」

「それより高橋」と石野が真剣な目をして言った。「小説家になるなんて夢のようなことを追いかけてないで、そろそろ本気で仕事を探したらどうなんだ」

「石野」と谷口が言った。「しばらく高橋の好きにさせてやれ」

「仕事をやめてからもう一年半近くたつんだぞ。本当に大丈夫なのか」

「それは高橋もわかつているはずだ」

あとで私がリストラの対象にはいつてなかったのを知った石野は、私が去年の一月、会社をやめたことに「何てバカなことをしたんだ」と怒った。逆に谷口は「やめるのもひとつの考えだぞ」とけしかけた男である。

横浜に住んでいる石野が帰ってから、谷口と私は二軒ほどバーやパブをはしごした。しかし、スーザンの姿をみかけることもなかったし、話して面白い外国人と知り合うこともなかった。

午前三時に、六本木ヒルズの前で別れるとき、谷口は私の顔をみると言った。

「時代劇ばかり書いていないで純文学を書けよ。時代劇やミステリーはプロの技が必要だ。純文学なら感性で書ける」

「私にその感性があるのかな」

「ないとおもったら、小説家をやめることだ」

海外ミステリー小説の翻訳者になる夢にみずから見切りをつけた、男の言う言葉には重みがある。

心配性の石野にはまだ詳しく話していないが、去年の十二月、失業保険の給付も終わりに近づいてきたので、私はインターネットのバイリンガル系の転職サイトに登録して、外資系を中心に行けるだけ前の会社と違う業界にねらいをさだめかなり真剣に仕事探しを始めた。ところが、今年の二月にはいるまでの約二か月間、十数社に応募したが一社も面接にさえ到達できなかった。書類選考の段階ですべて落とされたのだ。

（高望みはしていないのに、書類選考にさえとらないなんて。やはり、四十歳をこえた年齢が問題なのか）

一月下旬から前の会社と営業内容が同じか似ている業界にもターゲットをさだめたためか、こまめに職務経歴書を書きかえてきたことが功を奏したのかはわからないが、二月にはいるとようやく数社から面接に来てくださいたとの連絡が入り始め、四月にようやく一社から内定をもらった。しかし、提示された基本給は前の会社でもらっていた金額の六割にも到達しなかった。

（営業職だから、これにインセンティブとよばれる歩合給が加算されるにしても…）

三十一歳のときに結婚一年未満で離婚を経験している私には、現在、妻も子供もなく、この年齢なら本来面倒をみなければいけない両親もすでに亡くなっている。贅沢をしなければ何もしなくてもあと一年半は暮らせる貯金もある。年上の友人がやっている小さな会社の営業を時々手伝うことで、わずかながらも収入を得ている。

内定をもらった会社のオファーを私は断った。

そしてここひと月求職活動は開店休業状態だ。転職サイトにアップしてある職務経歴書のアップデートも、する気になれないでいる。

翌日の日曜日、午前十一時に起きシャワーをあびると、外に出た。五月晴れである。

都営地下鉄・大江戸線の国立競技場駅で一日乗車券を買いまず新宿にむかった。この一日乗車券があれば、東京メトロと都営地下鉄のふたつの地下鉄を一日中乗り放題できる。

新宿西口駅に着くとまっすぐ紀伊国屋書店に行った。「Lonely Planet/Tokyo」を買うためだ。七階の洋書売り場では、最近売り始めたばかりだろうか、ヒラリー・ロッドム・クリントンの『リビング・ヒストリー』のペーパーバック版が山積みされていた。

（ペーパーバック版が売り出されていたなんて、夢のとおりじゃないか）おもわずニヤリである。

「Lonely Planet/Tokyo」と一緒に『リビング・ヒストリー』も購入する。

次に新宿三丁目の「STARBUCKS COFFEE」に行き、アイスカフェラテのストールを注文し屋外のテーブル席にすわる。夢のなかですわっていた席だ。隣のテーブルにはまだヘビースモーカーの若い女性は来ていない。

『リビング・ヒストリー』を手に取り読み始める。おもったより英語も簡単で読みやすく、内容も面白いのでしばらく読むことに没頭してしまう。ふともいだしたようにテーブルのうえに投げ出しておいた「Lonely Planet/Tokyo」を手にとったとき、横からたばこの煙が流れてきた。隣の席をみると若い女性が美味しそうに細長いメンソール系のたばこを吸っている。夢のなかの顔まではおもいだせないが、着ている服の色があざやかな赤で同じだった。

しかし、夢のときと違いたばこの煙にむせはしなかった。

しばらくしてから浅草に行った。それから船に乗って浜離宮にゆき予定どおり午後四時過ぎに汐留シオサイトにやってきた。その行程でみた景色はまさに夢のデジャブだった。しかし、シオサイトでいくら網をはったところでスーザンの姿は影も形もなかった。夢の世界でみたような大道芸人達がいて、夢のなかでみたような見事な技を披露してはいたが。

（やはり夢はしよせん夢でしかないのだ）私は「Tully's Coffee」の屋外のテーブル席でため息をついた。

完全に日が暮れたあと、大江戸線の汐留駅にゆきにプラットホームに降りた。ホームには電車を待っている人達がたくさんいた。



(朝、地下鉄の一日乗車券を購入したのが間違いだったのかもしれない)

夢のなかでは少し遠くから彼女の姿を発見して、おもわず大声をだして走り、あわてて自動販売機で切符を買い、プラットホームに駆け降りたのだった。

プラットホームに降りると同時にはいつてきた新宿方面行きの電車に乗ったところで、うしろから急に肩をたたかれた。スーザンだった。

『雅美とよんだのに気がつきもしなかったわね』いつものように早口の英語だった。

「えっ！逆じゃないか、私のほうが発見されるなんて」

『何て言ったの。日本語をしゃべられちゃ、わからないわよ』

『わからないほうがいい』私も英語に切り替えた。

『……』

『でも、久しぶりだね。ちょうど一年ぶりだ』

『そうね』

『それに髪がずいぶんのびた』

『……』

肩まで髪がのびたスーザンは、一年前より艶やかで、私にとって幽玄世界に住む美しいゴーストそのものだ。

『どこに泊まっているの』そうきく自分の声が少しうわずっているに気がついた。

『新宿のサクラヤって旅館よ』とスーザンが答えた。『かなり古くていろいろなところにがたがきているようだけれど、オーナーの女性が素敵なの』

『ああ、あの敗戦直後に建てられたという木造二階建ての……。結構古い建物だよね』

『それがいいのよ。そこだけ時の流れがとまっている、という気にさせてくれるわ』

『あの周囲には高島屋とか高層ビルがかたまっているよね』

『雅美、そのなかにあるNTTドコモビルって、何。大聖堂ではないのですしよ』

『違うよ。携帯電話会社のビルだよ』

『正直に言うけれどかなり変ね。最初ウィーンのステファン・ドームにちよつと似ているかなとおもったのだけれど、それにしてはまったく魂がこもっていないわ』

『ものまねするだけじゃだめなんだよ。キリスト教文化が根付いていない国でヨーロッパの大聖堂みたいなものを建てたって意味がないよ』

『あいかわらずきつい言い方ね』スーザンはくすつと笑った。

私にはたまらない笑顔だった。

『でも、少なくともランドマークにはなるわね』

私達ふたりは六本木駅で電車を降りた。電車を降りるときそばにいたベビーカーに気づかずかかと先に降りようとした私は、あとでスーザンに「ダメじゃない」と怒られた。彼女は『雅美!』と声で私をおしとどめると、ベビーカーと若い母親を先に降ろさせた。そして『赤ん坊ってかわいいね』と私の耳もとにささやいた。

女性のささやき声は、男にとって甘い毒だ。私はおもわず身体に電気がはしった。

私は英国風パブ「Nottingham」にスーザンを連れていった。そしてはいつて左奥のレストラン・エリアにある四人用のテーブル席のひとつにすわった。ここならゆっくり話すことができるからだ。

『雅美、雅美のハウスに泊まらせてもらえない』とスーザンがいきなり言った。『えっ、無理だよ』

『どうして』

『どうしてって、恋人でもない女性を泊まらせるわけにはいかないよ』

『ゲスト・ルームぐらいあるんでしょ』

『ゲスト・ルームなんてないよ。欧米の家じゃないんだから』

かなり前になるが、サンディエゴに住んでいた知人（日本人）の家に泊まりに行ったことがあった。案内をしてくれた知人の妻（アメリカ人）は『小さい家なの』と言いながら、その家にはバス・ルーム付きのゲスト・ルームがあった。それでいて毎月のレンタル料は千ドルだから、1DK私の部屋の家賃とほとんど変わらない。

『ショーンのアパートメントにはゲスト・ルームがあったわよ』

『ショーンって?』（日本に来たことがあるのなら、何故私にも連絡をくれないのだ）

『私のお友達。今、バイスプレジデントとして日本に赴任しているの』

『男性、それとも女性?』

『男性よ』

『そんなところにひとりで泊まったら、エリックが心配しない?』

『大丈夫よ。彼はゲイだから。それより私達だってモロッコでは三人でひとつの部屋に泊まった仲じゃない』

（そうだ、そうだった）

背景の山々が美しく、坂の多い白い家々の町モロッコのシャウエンで知り合った私達は、シャウエンから席取り合戦の激しい民営バスにゆられ、五時間か

けてモロッコでは物価の高いフェズにゆき、安くていい部屋がみつからなかった。三人で一部屋をシェアしたのであった。ダブルベッドに彼女とエリックの夫婦が寝て、私はひとりで隣のシングルベッドに寝たのである。

『だめだよ。とにかく私の部屋は無理だよ。狭すぎる。そのショーンのアパートメントっていうのは、多分米ドルに換算したら、毎月一万ドルぐらいの部屋だよ』

『そんなに高いの』

『そう』

『ねえ、それより、どうして私の顔をみたとき驚かなかったの』

『昨日…』私は少したじろいだ。『どういうわけか、あなたと汐留シオサイトで出逢う夢をみたんだ。それで今日シオサイトに来たんだ。ただ、夢では私があなたをみつけたんだけど、逆に私が発見されてしまった』

『そうだったの。夢のお告げで逢えるなんて、あなたがモロッコで話してくれた「神秘の蝶」のストーリーに似ているわね』

『……』(私が話したあの南米の寓話をおぼえてくれていたんだ)

私はスーザンが携帯電話を持っていることに気がついた。多分プリペイド式ののだろう。

『それより、携帯電話の番号とメールアドレスをおしえてくれない』

『それをきいて、エリックにおしえるつもり?』スーザンの目付きが鋭くなった。

(何てカンがいいんだ)

『ほら顔色がさっとかわった』

『……』

『エリックからメールでもはいつているんでしょう』

『ふたりのあいだに何があったの』

『今はまだ言えないわ』

スーザンは遠くをみつめた。

『今日の夜からでも、京都のほうに行ってみようかな』

『京都に?』

『そう、夜行バスで。東京には泊まる場所もないしね』

『また皮肉を言う』

『エリックには心配しないで、って言うておいて』

『水曜日の飛行機で来るって言うてたよ』

『そう。それじゃ早すぎる。日本に来るんだったら一緒に来てほしかった』

『……』

スーザンは立ち上がった。

『雅美、あの南米の「神秘の蝶」の物語は興味深かったわ』

『そうかい。ありがとう。それでどんなところが興味深かったの』私は彼女をみあげた。

『みつけても決して獲ってはいけないというところが…』

『そう？』

『そう』

『…』

『それじゃ、私は』

『ちよっと待つて』

私はスーザンに自分の携帯電話の番号とメールアドレス、そしてパソコンのメールアドレスを書いて渡した。

それを受け取ったスーザンは、私に笑顔をみせると「Nottingham」からでていった。そして私は彼女とふたりつきりでひとつ屋根の下に眠るチャンスを永遠に失ったのである。

翌日、月曜日の午前十時ちよつと過ぎ、上野公園をしばらく歩き時間をつぶしてから、私は上野広小路の風月堂にはいった。坂口泰子さんの母違いの姉、坂口智子さんが一階の喫茶部の一番奥にすわって本を読んでいた。彼女は白地にヒョウ柄をあしらったドレスを着ていた。たしか私よりひとつかふたつ年上のはずだ。

「あなたとは昔ここでよく鉢合わせしたわね」と智子さんは言った。

「あなたがここによく来ることは、前からずっと知っていたのですよ」

「…」

ジャズ歌手である彼女は毎週月曜日の午前十一時から、この近くのレッスン室で先生についてヴォイス・トレーニングをしている。

私は谷口の家族や泰子さんの仕事仲間達と何度か一緒に行った海外旅行の待ち合わせや打ち合わせをかねて、この喫茶室で彼らと数度お茶をしたことがある。 「レッスン前の時間によく姉がここでくつろいでいるの」と泰子さんがみんなにしゃべっていたのを、そのとき横にいた私はきいていたのである。

「今日はおききたいことがあるのですが…」と私は言った。

「いいわよ」

彼女は読んでいた本をバッグにしまった。彼女の読んでいた本はガルシア・ロルカの詩集である。

「智子さんは何故医師をやめられたのですか」

彼女は三十歳のとき医師をやめ、ジャズ歌手をめざしたのであった。

「どうしてそんなことをきくの、雅ちゃん」

「私の外国人の友人の妻でスーザンという看護婦の女性がいるのですが、彼女は去年の冬病院をやめたのです。そして、今度は家出をしてしまった。去年の冬病院をやめたのと何か関係でもあるのかとおもって…」

「家出？」

「今日日本に来ているのです」

「……」

「昨日の夜彼女と会ったときは、これからバスで京都に行くと言っていました」

「それで病院をやめた原因はわかっているの？」

「私にはわかりません。ただ、やめたとだけ友人と電話で話しをしたとき、きました」

「やめる前にどんなことがあったのかきいている？　どんな小さなことでもいいのだけれど」

「彼女の親しかった患者さんが死んだそうです」

「そう。それはいつ頃」

「去年の夏だそうです」

「それじゃ、それが直接の原因ではないわね。他には？」

「去年の秋、長くいた新生児室の担当からはずれガン病棟に異動させられたそうです。ふたつとも彼女からのメールにそう書いてありました」

「彼女は産婦人科の看護婦さんね？」

「そうです」

「……」

「……」

「もしかするとそれかもしれないわね」

「というと？」

「私の仲良くしていた看護婦さんで同じケースがあったのよ。彼女は分娩育児部、つまり出産をあつかう部署で助産婦として長く働いていたのだけれど、病院の事情でガン病棟に移ったの。移ってしばらくは何でもなかったけれど、ある日、疲れきった顔で私のところにやってきて、もうだめだと言うの」

「……」

「毎日誰かが死んでゆくことに耐えきれなくなったのね」

「それって看護婦をめざした人なら、なる前にわかっていることではないですか」

「看護婦だって人間よ、高橋さん」

智子さんは恐い目で私をみつめた。

「……」

「わかるでしょう」

「はい」

「私の場合は少し違うけれどね」

「どう違うのですか」

「私の場合は、父の束縛から逃れたかったの」

「……」

「医師になることは私の夢ではなく、父の夢だったの」

（そういえば、スーザンの母親も看護婦で、彼女はその影響もあって看護婦になったって、言っていたな）

「そうですか。でも、よくおもいましたね」と私はきいた。

「高山がそばにいてくれたから、おもいきれたのだとおもうわ」

智子さんの言う高山とは彼女のパートナーで、六本木のジャズ・ハウス「夜はやさし」のオーナー高山虎之介さんのことである。

「高山さんとはどうして知り合ったのですか」

「彼、私の患者だったのよ」

（そんなに長い付き合いだったのか）

しばらく、私はショックが抜けなかった。実は私はジャズ歌手である智子さんのおっかけをやっていたことがあるのだ。ライブ音楽が好きな私は、泰子さんの姉がジャズ歌手をやっていると谷口からきいて、彼女がメインの歌手をとめる「夜はやさし」にゆき、彼女にはまり高山さんが彼女のパートナーだと知るまでのしばらくのあいだ通いつめたことがある。私は今でも智子さんに淡い恋心をいだいている。

谷口に「それを早くおしえてくれればよかったのに」と言ったら、あいつは「何度かそれとなく言ったのにおまえが耳をかさなかったただけだ」と言っていた。

「どうしたの」

「いいえ、何でもありません」

「……」

「智子さんは死ぬのが恐くありませんか」

「いきなりどうしたの」

「いや、死の話をしていたものだから……」

「そりゃ、私だって恐いわよ。でもね、私自身が死ぬのはさほど恐くないわ。」

若い頃医者といいつも死を間近でみてきたから。死ぬということがどういうことなのかよくわかつているし。それより、私のそばにいつもいてくれた人達が突然消えていなくなるこのほうが耐えきれないとおもう」

「そうですか。私と同じですね。私も誰かを失いたくないほうが先です」

数年前に父が死んだときはさほどでもなかったが、二十一歳、大学四回生の冬に、母が死んだときは慣れ親しんだ身体の一部をえぐりとられたようで、しばらく何もしたくなかったのを今でもおぼえている。マザコンだった私は、母の死で母から自立した。だから、母の死が私の人生の大きな転機になったのだ。

「ところで、土曜日は来てくれるのでしょうか？」

「土曜日？」

「優ちゃんからきいてないの？」

智子さんの言う優ちゃんとは谷口優一のことである。

「たしかにきいてはいるけれど、その家出した女性の旦那が土曜日に日本に来るのでいけるかどうかは…」

「そう。冷たいのね」

「そう。冷たいのさ」

「ま、冷たい人。今日は私のことを朝っぱらから待ち伏せしたくせに」

「そう言わないでよ。友達のことを心配しているんだから」

智子さんは私に優しい顔をむけると、

「早く京都に行つてあげなさい」と言った。

「何故私がこれから京都に行くつてわかるんですか。このサイズのバックパックを持ち歩いているのはいつものことなのに」

私は着替えと洗面道具をいれた小さなバックパックを床に置いていた。

「そう顔に書いてあるわよ」

「……」

「彼女が京都のどこにいるのかわかっているのでしょうか？」

「はい」

私はおもわず智子さんに嘘をついてしまった。

彼女と別れると家にはもどらずその足で東京駅にゆき、私は午前十一時半過ぎの新幹線に乗って京都にむかった。京都に着いた私がまずやったことは、

「Lonely Planet/Kyoto (ロンリープラネット・京都)」を買った「PLACES TO STAY - BUDGET (宿泊場所・低予算)」のセクションで紹介されているユースホテル、ゲストハウスそしてホテルなどの安宿をしらみつぶしにあたることだった。しかし、彼女の写真を片手に午後八時までの五時間以上バスや地下鉄もつかって歩きまわっても、スーザンらしい外国人の姿はどこにもなかった。外国

人のことだからお寺の宿坊に泊まっているかも知れないとおもい、そちらにもあたってみたのだがだめだった。

夜は、「友人のトルコ人が京都での常宿にしている」と石野がおしえてくれた「旅荘・河原町」に宿をとってから、「Lonely Planet/Kyoto」の巻末にまとめられているマップをみながら河原町・木屋町エリアを中心に、祇園・清水寺エリアや南禅寺エリアまで足をのばして、パブやバーだけでなく居酒屋や寿司屋など日本の伝統的な店も範囲にいて、この英語で書かれているガイドブックに掲載されている店をひとつひとつ訪ねてみた。また、少し自分の勘をたよりにガイドブックには載っていない小料理屋もいくつかのぞいてみたが、彼女の姿はみあたらなかった。ちなみに、「旅荘・河原町」は「Lonely Planet/Kyoto」には載っていない。

深夜、宿にもどってから、宿泊施設はともかく飲食店はガイドブックより自分の勘をもっと大事にしたほうがよかったのかもしれないと後悔した。

あとで彼女にきいたらその日は、東京からの夜行バスで京都・河原町に午前七時半過ぎに到着し、しばらく河原町付近を歩いたあと、四条駅から京阪電鉄に乗り出町柳駅で叡山電鉄に乗り換え鞍馬・貴船エリアにむかったと言っていた。そしてしばらく鞍馬山を散策したあと、日が西に傾き始める前に鞍馬をでて、昼なお暗いときく山道を歩いて貴船にゆき同地の高級旅館に宿泊したとのことだった。

（源義経ゆかりの鞍馬寺？ 何故だ。「Lonely Planet/Kyoto」にもさほど詳しく紹介されているとおもえない場所を……。いずれにしても、バックパッカーらしくなく高級旅館に泊まれちゃ私にさがしだせるわけがないじゃないか）

その日の夜は、何故か夢をみなかった。いつもなら何かしらの夢をみるはずなのに…。

翌日の火曜日、めずらしく朝早くから起きだすと（海外旅行をしているときでも、私は早起きのほうではない）、まず午前六時からあいている清水寺、それから銀閣寺、金閣寺、嵐山、三十三間堂、…と私はおもいつくままに京都市をさがしまわった。しかし、スーザンを発見することはできなかった。

この日、スーザンは早朝京都を離れていたのだからみつかるはずはなかったのである。ただ、彼女によると『雅美が清水寺をめざし、三条大橋を歩いて渡っていた時刻には、私は（京阪電鉄の始発駅である）出町柳駅にいたはずよ』とのことだった。

（出町柳？ あのととき、スーザンは私の目と鼻の先にいたのか）

アルバイトでしている仕事の件で夕方から一回り年上の友人の社長と会う約束をしていた私は、午後二時過ぎの新幹線に乗って京都をあとにした。



一九九七年に竣工したJR京都駅をみると（この「宇宙戦艦ヤマト」みたいなマンガチックな外観はどうしたことだろう）といつもおもう。内観は巨大なガラスの都市だ。

最近訪ねた日本の地方都市のJRの駅とその周辺は、どの駅に行っても駅前の広場から何からみな同じようなつくりでびっくりさせられた。地方都市の東京をモデルにしたクローン都市化が急速に進行しているのだ。それもモデルはMacintosh OS X Pantherの東京ではない、一世代バージョンの古いMacintosh OS 9の東京だ。

数年前、桜をみるため訪ねた弘前駅とその周辺の町並みは、素敵だった二十年前とはすっかり様変わりしていた。

（美しい城下町、弘前はどこに消えた。弘前城がなければここは東京の郊外の綺麗にリニューアルされた駅や町とほとんどかわりがないじゃないか）

もしかしたら、人間の姿をしたひとりのコンピュータ建築家がCAD/CAMをつかって、次から次へと、テンプレート化された過去の建築デザインのデータをコピー&ペーストして都市を設計しているのかもしれない。そこには、人間にとって大事な想像力のけからさえなかった。

（一部の日本人の心のなから、完全に野性が消えかかっているのかもしれない）と感じた。

だから、翌日訪ねた角館で、日本らしい伝統的で落ち着いた町並みを発見したときは、ほっとしたものだ。

それにくらべればJR京都駅のデザインは、外観はともかく内観は二十二世紀のステーションを意識し、来年春に出荷が予定されているという最新鋭のMacintosh OS X Tigerのように（?）、かなり斬新で非常に個性が豊かだが、そこに人間の温かい血がかよっているようには感じられず、私の大好きな千年の都・京都の顔としてはやはり好きになれない。だから私は京都にゆくときはJR京都駅を避け、いつもまず大阪にゆき大阪のホテルに荷物をあずけて、大阪・梅田駅から阪急電車に乗り特急で京都・河原町駅にむかう。今回は時間がなかったのでそうしなかったが、これが私の京都を訪ねるときの儀式だ。

同じことは、スペインにもいえる。去年久し振りに訪ねたスペイン北部・バスク地方の大都市ドノステアは、バスクの香りがまったくない世界のどこにでもあるような高級リゾート地に変貌していた。

（ドノステアはスペイン名であるサン・セバスティアンという名称のほうがふさわしい都市になってしまった）とそのときおもった。

だから余計、同じバスクの大都市でも、昔ながらの大きな旧市街があり路地裏の散歩が楽しいビルバオやいかにもバスクらしいゲルニカに愛着が湧いてし

まう。ビルバオには、スペイン人はいることができない、バスクリンのみで構成されているプロのフットボールクラブ、アスレティック・ビルバオであるのだ。彼らはリーガ・エスパニョーラの一部に所属し、熱狂的なビルバオ市民の応援をうけ多国籍のスーパースター軍団であるレアル・マドリとも対等に戦う。

新幹線のなかで私はふたたび京都駅をおもいかべていた。

（これが東京駅のデザインだったら好きになっただろうに）とおもう。現在の東京は無機質な都市なのだから。

その日の夜、午後九時半過ぎ私は谷口と「Nottingham」六本木店で会った。

「スーザンと会ったんだって」と谷口がきいた。

「ああ、でも空回りだったよ」

「で、エリックには連絡したのか」

「した」

「それで」

「水曜日にはでてこれるはずが、土曜日にずれるそうだ」

「どうして」

「担当している顧客のつよい要望だそうだ」

「他の人間に任せられないのか」

「彼の担当している企業が日本企業だそうで、今かかえている問題を処理してからじゃないと、このプロジェクトからはずれてもらっては困るとエリックの会社にねじ込んだそうさ。いやなら、次の大きな案件は他の会社に頼むことにすると言われたそうさ」

「彼しかできないのか」

「そうじゃないけれど、彼だからこそそのプロジェクトを任せただというのが、その日本企業の言い分で、急に家庭に問題だからとあらかじめ決まっていた休みでもないのにプロジェクトからぬけるのは約束違反だ、と強行に言われたらしい。エリックとしても妻が家出したとまでは言えず困っているらしい」

「……」

「彼が勤めている会社は日本の顧客が多いそうさ」

そのとき、西洋人の男女ふたりが私達の前にすわった。ふたりとも三十台前半にみえた。彼らがバックパッカーらしいのは服装や醸し出す雰囲気でわかる。私達はもちろん、いつものように、出入り口からみて右側のエリアの中心にある、長方形の大きなテーブルにすわっていた。

『ねえ、そろそろヨーロッパにもどるか、アメリカに行こうよ。やはり言葉が

わからないというのは不便よ』

『……』

『日本は先進国だからもつと英語をしゃべれる人が多いかとおもったのに、私が話しかけようとすると、みんな私の顔をみて手を振りながら逃げるの』

『ハニー、それは逃げているわけじゃない。シャイなんだ』

『あなたと違って私はずうずうしくなれないのよ。いずれにしろ私は避けられているように感じたわ。とにかく、マレーシアや香港では言葉でほとんど苦労しなかったわよね。意外だったのは韓国、日本よりずっと英語をしゃべれる人が多かったように感じたわ。それにアジアにきてからずっと漢字に囲まれる生活がつづいて、多分私、疲れちゃったのよ』

『またそれか。アジアに來ているんだよ。それは我慢しないと……』

『……』

男性と私の目があつた。

『ハ―イ』と私が言った。

『ハ―イ』男性も笑顔を私達に向けてきた。「Do you speak English? (英語をしゃべれるのですか)」

『イエス』

『……』

『悪いけれど、きいてしまいました』

『かまいません。お気を悪くされましたか』

こういうときの西洋人の如才ない対応はわれわれも見習うべきだとおもう。

『いいえ。そのことについては私も海外でよく似た経験をします。私の場合、もちろん漢字ではないのですが……』

女性が私をみた。

『友人達とよくタイに行くのですが……、耳にはいつてくる言葉より、街中に氾濫している見慣れないタイ語の文字の洪水に疲れてしまつて、その環境になれるまでいつもかなりの時間がかかつてしまいます』

『そうか』横から谷口が口をだした。『それでおまえはいつも、「タイは苦手だ。タイは苦手だ」と言っているのだな』

『まあな。だから私の場合日本にもどつてきて漢字をみると逆にほっとする』私達をみつめていたふたりは、そこでどつと笑つた。

『遠くまできてしまった、と感じたことはありますか』男性が質問してきた。

『丸一日以上飛行機に乗つて南米に行ったときにも感じなかったのですが、去年、スペインから船でモロッコにはいり、何時間もバスにゆられてマラケシュに着き、途中で知り合つたオーストラリア人の夫婦が翌々日バスで砂漠の町に

ゆくのを、バスの発着所で見送ってひとりきりになったとき、心の底から私は日本に帰れるのだろうかと感じ非常に心細かったのをいつもおもいだします』『なるほど』

『しばらくしてスペインのマラガにもどったとき、どこか日本にもどってきたような安堵感を感じました』

『多分、私のワイフが今感じているのもそれだとおもいます』

バックパッカーの夫婦としばらく話しをした私達は、彼らと別れると、その足で久しぶりに六本木のバー「Do the Right Thing」に行った。

（しかし、言葉のあまりつうじないこの国で、スーザンはひとりで今頃どうしているのだろうか…）私は歩きながら少し考え込んでしまった。

「Do the Right Thing」、スパイク・リー監督の有名な映画のタイトルが店の名前になっているとおもう人は多いだろうが、この店のオープンは映画の公開よりずっと前である。この店にはいつてすぐ感じるのは、ここは日本ではないという感覚だ。とにかくこの店にはありとあらゆる人種がいる。人種の坩堝といわれるニューヨーク、それもハーレムの熱い夜がそのままここにやってきた感じだ。それにしても、日本人の数はおどろくほど少ない。特に日本人の男はほとんどいない、とっていい。日本人のビジネスマンかとおもってそばにいてみると、彼らの話している言葉は、日本語ではなく韓国語か中国語だった。フロアは平日の夜なのに人で満ち溢れている。

ヒンズー教徒ではないかとおもわれる双子の女性が踊っている。彼女達がサリーを着て踊っているわけではないが、それはまるでインドの大人気音楽映画「ムトゥ踊るマハラジャ」をみているようだった。びしっとしたスーツに身をつつんだアラブ系のビジネスマンが、横にいるセクシーな服を着た白人の女性と、お互いの口と耳を近づけるようにして、激しい音の洪水のなか、楽しそうに秘密めいた話しをしている。私の横ではラフな格好をした男達が、手振り身振りも大仰に何事かスペイン語で言い合っている。

言葉の掛け合いに、スペイン語のリズムは最高だ。

この店でマジョリティを占めているのは、やはり白人の男女と黒人の男達だ。スーツやビジネスウェアに身をつつんだ人もいればカジュアルな服をおしゃれに着こなしている人もいる。

そのなかでひとときわ目を引くのは、それぞれ個性的なスパッツとタンクトップ姿でさまざまな国籍の国の人達とじゃれあうように話したり、ソウルフルなダンスを踊ったり、そして携帯電話やデジカメで記念写真を撮りあっている、三人組の日本人の女性である。あたまのかたいオヤジ達からみれば、外国人に媚を売っているようにしかみえかねないが、実際はそうではないのだ。事実、彼

女達は日本人の私が話しかけてもいろいろな面白い話題で楽しませてくれる。彼女達は日本にいて外国にいるという、この特異な場の雰囲気と感覚を存分に楽しんでいるのだ。

「しばらく海外に行けないから、ここに来て外国を疑似体験しているの」とそのうちのひとりは言っていた。

谷口は彼女の言ったこの言葉にいたく感銘をうけ、「そのとおりだ」を連発していた。

谷口はその三人組の日本人の女性とフロアの中央にゆき、一緒に踊り始めた。(あいかわらず、あいつのリズム感はいい)と私は羨ましくなってしまう。

フロアの奥に引込んだ私はビールを片手に少し物思いにふけた。

私が英語に興味をもったのはいつ頃のことだったろうか。それは中学一年の冬、足を骨折し学校にゆかず自宅の布団のうえでずっと療養していたときのことだ。東大の安田講堂事件のあった冬だからなおさらよくおぼえている。

発端は私が英語の発音記号に興味をもったことだった。もうはつきりとは覚えていないが、暇を持て余していた私に、大学の四回生のときに亡くなった母親が「これでも読めば」と言つてとある学習雑誌を持ってきた。その雑誌のなかに発音記号について書かれた小冊子が付録としてはいっていたのである。私はその付録をみて発音記号をおぼえ、布団のうえで、手許の英和辞典を引き片っ端から知っている単語の発音を暗記していった。

そのうち、英語のスペルと発音とのあいだに、かなり複雑だが一定の規則性があることに気がついた。

たとえば、『子音+e』の直前にある『a』と『i』は、『make (メイク)』や『take (テイク)』、『like (ライク)』や『time (タイム)』のように、それぞれ『a』は『エイ』、『i』は『アイ』と発音される。『oo』と『ou』は『pool (プール)』や『cool (クール)』のように『ウー』と発音される」などである。

何と発音すればいいのかわかれば、言葉はどんどん楽しくなる。

(しかし、スペイン語のアルファベットや日本語のローマ字は、英語にくらべると本当に単純なんだな。書いてあるとおりそのまま発音すればよいのだから…)

「何をぼけっとしているんだ」谷口が私の肩をたたいた。

「ちよっと考え事を…」

「こんなところで考え事をしてどうする。もっと楽しまない」と

「……」

「高橋、明日は午後から、二、三日大阪に行ってくるぞ」

「どうしてだ」

「仕事の打ち合わせだ」

「子供の面倒は誰がみるんだ」

「坂口の母親が来てくれる」

「泰子さんの？」

谷口は自分の妻をよぶとき、彼女の姓でよぶ。

「そうだ。孫に会うのをいつも楽しみにしているんだ」

「スーザンにもし偶然向こうであつたら頼むぞ」

「わかった。それより、あの娘達ともう一軒飲みにゆくぞ」

私の知らない間に、谷口は例の三人組の日本人の女性を連れだすのに成功していたのであつた。

私と谷口は、三人組の女性を歩いてすぐそばにあるトルコ料理店「CAN」に連れていった。「can」と書いてジャンと読む。

彼女達に話しをきくと、「三人でよく海外に行っているの」と答えたので、私が「ツアーで、それとも個人旅行で？」と質問すると、「個人旅行なんて英語もあまりしゃべれないのにできるわけないじゃん」と三人のうちひとりが答えたのをうけて、谷口が「さっきは外国人と楽しそうにしゃべっていたじゃないかと」と彼女達に話しを切り出し、個人旅行の楽しさについて、いろいろな比喻をまじえ大げさな身振りで三人にとくとくと説明すると、だんだん彼女達の目が輝いてきた。

最後には、三人は口を揃えて、「次は絶対ツアー旅行にはしない」と谷口に誓っていた。

（谷口の話しの上手さは一緒にナンパをやっていた二十年前とかわらないな）と私はおもった。

午前二時、明日は朝から年上の友人の経営する会社で営業の仕事の手伝いをする事になっていた私は、いつしかちゃっかり朝まで一緒に遊ぶことを決めていた谷口と三人組の女性達を店に残し、いつものように歩いて国立競技場近くにある自宅にむかった。

（そういえば、去年の今頃はモロッコにいたのだ）

私の心のなかにモロッコの景色がよみがえってきた。あれはまずフェズだった。

エリック、スーザンと私の三人は、夕方、メディナの外にある周囲のすべてを見渡せる小高い丘に登り、眼下に広がるフェズの町をみていた。スーザンの横顔を見ると感極まった表情をしている。凜とした美しい表情だった。

私がスペインからモロッコに行ったのは、谷口のすすめによるもので、正直をいうと、最初はあまり乗り気ではなかった。彼の目には「マグレブに一度で

いいから行ってこい。人生が変わるから」というつよいメッセージがありありとあった。マグレブとは「日没するところ」という意味で、アフリカ北西部にあるモロッコ、アルジェリア、チュニジアの総称である。

スーザンのあのときの感極まった顔は、ようやく憧れの国にきたという感動であつたろう。

（それにくらべて私は…）

旅をしながら、彼らふたりはよく人に話しかける。話しかける役はだいたいエリックだが、スーザンの絶妙なフォローが話しを盛り上げている。彼らが話しかける相手は、私達と同じ旅行者や私達が直接言葉をかわす宿、茶屋、食堂、ショップなどのオーナーや従業員達だけとはかぎらない。現地のふつうの人達にも、相手が英語をしゃべる、しゃべれないにかかわらず、バス、茶屋、食堂、ショップなどで目があうと必ず言葉をかわそうとするのだ。これは「人々との交流」が旅のテーマであるバックパッカーの基本中の基本だが、ふたりのエネルギーには感服する。そして、彼らふたりも私と同じでよく歩きまわる。これもバックパッカーの基本だ。

私はだんだん旅の醍醐味を感じ始めていた。

翌日の朝、日が昇らないうちに起きだし、私達三人は昨日席の予約をいれてある国営のバスの発着所に行った。民営のバスはエアコンがないのはともかくとして、言葉のあまり通じない国で、預けた荷物を座席の下に格納庫からバスの屋根の上に勝手に移動させられたりバスの席取り合戦がはげしかったりで、短時間の移動なら我慢できても外国人の私にとって長時間の移動は精神的にきつい。それに途中でできるだけお客をつめこもうとするからしよっちゅう停車し時間もかかる。フェズからマラケシュはバスで九時間以上かかるのである。だから私はエリックを誘って、民営のバスでいいというスーザンをなだめすかして、指定席で、荷物の預かり証ももらえ、エアコンもきいている国営のバスを利用することにしたのだ。

マラケシュにゆくすぐ途中にある王立大学の大学院にかよっているという裕福な家の女子大生が私の隣の席にすわった。民営のバスにはなかなか乗ってこないクラスの人だ。英語の発音もネイティブ並みでボキヤブラリーも豊富な彼女は政治・経済と話題も豊富だった。日本の経済発展の要因についてもこまかくきいてきた。どこか自分達の国に役立つ発想はないのかと貪欲であった。経済に詳しくない私は彼女の質問にたじたとした。インタビュアーとしても一流で将来政府高官として国のために働くのではないかと感じた。

綺麗な建物がつづく王立大学のキャンパスから少しはずれたところに、緑におおわれた屋外のバス発着所がある。そこにバスが到着すると彼女は立ち上がり、

『今日は楽しい会話ができました。素敵な旅をおつづけください』と言って、去って行った。

バスが王立大学の敷地からでてハイウェイにはいると、少し離れた席にすわっていたスーザンが近づいてきて、『あの女性とどんな話しをしたの』とか『ちゃんとメールアドレスはきいた?』と早口の英語できいた。『私が政治・経済の話が中心で色っぽい話しはでなかった』と答えると、少女のような無垢な表情をして軽く笑った。

午前六時にフェズをでたバスがマラケシュに到着したのは、午後四時もあり過ぎてからだった。アフリカ大陸の北西部に位置するモロッコは、西側を大西洋に接し、日本の本州、四国と九州をあわせて東北地方をかなりふくらましたような形状をしている。もちろんモロッコのほうが、日本より国土ははるかに大きいのだが。マラケシュはそのモロッコのへそにあたる大きな町だ。日本でいえば長野県の松本あたりに位置する人口九十万人の都市ということになるのだろうか。そうすると、タンジェは津軽半島の北端にある大きな港町、シャウエンは秋田県の大館付近にある山々にかこまれた美しく小さな村、フェズは山形県の米沢付近にある人口百三十万の都市、カサブランカは新潟県の柏崎付近にある人口三百二十万の大都市、そして紛争地域である西サハラは関西以西にある砂漠地帯というイメージになる。

(マラケシュにいったんはいつてしまえば、しばらくモロッコからでることは難しくなるな) 私はぼんやりながら地の果てまで来てしまったという感覚につつまれた。

マラケシュに到着するまで途中何度か休憩があったのだが三人とも言葉がわからないため、午前十一時の休憩が少し休憩時間の長い昼食タイムとは気づかず、トイレにいつて用をたしているあいだにバスの他の乗客はさつと昼食をすましていた。このため、私達三人はビスケットを食べる以外移動中食事をすることができず腹ぺこだった。

国営のバスが発着するような大きなターミナルではなく、小さな民営のバス会社の事務所(CTMと小さな看板があるから国営のバスの事務所とわかるが)らしき建物の前の道端でバスから降ろされた私達は、まず町の中心であるエル・フナ広場をめざすことに決めた。ところが、五分程歩いてからスーザンが急に立ち止まり、バックパックをおろすと、『バックパックを今回の移動でこわされた』と言って目を潤ませ始めた。『民営のバスだったらこんなことにはならなかったかもしれないわよ』とエリックに苦情を言っている声が私の耳にもとどいた。スーザンが指差している箇所をエリックがみると、たいしたことがないようで、私をみて『大丈夫』という合図を送ってきた。



スーザンが落ち着くのを待つて、ふたたび私達はエル・フナ広場にむかって歩き始めた。エル・フナ広場は朝、昼、夜の三つの顔を持つエキサイティングな広場といわれている。朝、大きな市がたち売り手や買い手達の商談の聲がまびすしい。昼、蛇つかいをはじめとする多種多様な大道芸人達のパフォーマンスに拍手喝采がおきる。そして夜は…。

スーザンはときどき立ち止まり一心不乱に「Lonely Planet/North Africa (ロンリープラネット・北アフリカ)」に載っているマラケシュの地図をみていた。彼女の横顔をみながら、ガラス細工のようなところがあるな、と私は初めて感じた。エリックと私はエル・フナ広場までの先導を彼女にまかせることにした。エリックはあとでこういうときは彼女の好きにさせることにしていると私に述懐している。

地図を読むのが苦手なスーザンが先導したため三十分程ですむところを五分近くかかった私達は、宿のそれぞれの部屋に落ち着くと、シャワーをあげ荷物を部屋において外にでた。スーザンはいつもの優しい彼女にもどっていた。私達は早速、エル・フナ広場にでた。

どこからか聞こえてくる打楽器のリズムに、広場を埋め尽くすように集まっている人達がしゃべるアラビア語の抑揚が混じり、何ともいえないざわめきが広場に満ちている。

広大な広場の至る所に焼き肉の屋台が立ち並び、肉の焼ける音やにおいが充満し、そこらじゅうから煙がもうもうと立ちのぼっていた。十メートル先に何があるのかもわからないくらいだ。

すでに日は沈み、夜の帳（とばり）がおりかけていた。

私達は広場に溢れている人の波をかきわけ屋台のひとつにすわり、串刺しの焼き肉にむしゃぶりついた。十二時間ぶりのきちんとした食事だった。

エル・フナ広場の熱気は凄い。ここには人間の生命エネルギーが凝縮されているように感じた。

生きているという充実感が、私の身体の奥底から湧き上がってきた。

私の目に緑の深い東宮御所がみえてきた。国立競技場のそばにある自宅まであと少しだ。

この日本にエル・フナ広場やボンボネラ・スタジアムのような人間の生命エネルギーを感じさせてくれる場所があるのか、とおもう。汐留シオサイトや六本木ヒルズのような無機質な場所ではない。ここに人間がいるという有機的な場所だ。

翌日、水曜日は六本木には行かずめずらしくまっすぐ家に帰った。冷蔵庫に

常備している中びんのエビスビールをグラスに注ぎ一気に飲みほすと、iBook G4 (Mac OSX Panther) を起動させ自分のホームページをみにいった。トップページからリンクしているブログや掲示板にはコメントやトラックバックがいくつかはあった。

私のホームページ「英語が好き」は、こんな文章で始まっている。

『英語がしゃべれない英文科の学生なんて、ビジネスの世界ではまったく存在価値がないのだよ』

今から二十五年ほど前、私が大学の四回生だった秋のことです。第一希望の会社の首席面接官は、五人の学生を相手にした集団面接の場で私に顔を向けながらそう言う、その後の四十分間私を完全に無視しました。三人いた他の面接官も、私には話しかけもしません。他の学生達にはさまざまな質問をあげたというのに。それが新卒時の就職活動での最初の面接体験でした。結局その会社だけでなく、私が働きたいとおもった会社すべてから不採用の通知を受け取りました。最初の面接で受けた衝撃が大きすぎたのです。若かった私には、対応することができませんでした。

……

村上春樹や村上龍など現代の日本文学に大きな影響を与えたアメリカ文学の鬼才、リチャード・ブローティガンを卒論のテーマに選んだ私は、彼の書いた小説や詩、それに彼や彼の作品についての論文などさまざまな本や文献を英語で読み、毎日、タイプライターにむかつて英語の文章を書いていた。ところが、当時の私は、英語をきいたりしゃべったりすることがまったくできなかったのだ。テレビやラジオからきこえてくる英語は、それこそイルカの泣き声と同じで訳のわからないサウンドの羅列だった。ところが、大学卒業を目前した三月のある日、突然気がついた。日本語と英語は、まったくリズムの違う音楽なのだ。例えて言えば演歌に慣れ親しんだ耳を、ジャズやロックのリズムもわかる耳にしないと、英語は一生ものにならないととき強くおもった。

それで結局どうしたのかというと、英会話スクールにかようお金や英語教材を買うお金もなかった、自分の部屋にいたときには、一年間FEN（現在のAFN）をかけっぱなしにすることにしたのだ。特に、FENの定時ニュースは神経を集中させてきいた。二ヶ月たち、何の変化もない。半年がたっても、何の変化もなかった。ところが、やっぱり私には才能がないのだとあきらめかけていた約九ヶ月後のある日、突然、私の身体の中で化学反応が起きた。ラジオをつけFENのニュースをきいたら、ごく一部だったけれど何故か英語が聞き取れたのだ。それからしばらくしてそれが主語と述語で、それが目的語や補語かわかるようになった。そしてその一週間後には前置詞や接続詞が聞きわけ

られるようになった。日進月歩で身体が進化するとはこのことで、急にヒアリング能力が上達していった。

「まずは英語のサウンドの海に沈み、水のなかの魚のようにえらで呼吸できるようにすることだとおもいます」とホームページのイントロダクションの最後で書いたが、まさにそのとおりだとおもう。私は英語をしやべる魚になったのだ。そしてさまざまな国々のいろいろな考えを持った人々と直接話することができるという新しい世界が目の前にひらけた。私にとって、「英語がしゃべれない英文科の学生なんて…」という言葉が逆にその後の人生のバネになった。

谷口はこの話をきくと

「おまえは鈍感なんだよ」と言った。

「鈍感？」私はめずらしく谷口の言葉にムカツときた。

「いい意味でね。高橋と違って心が繊細な人間だったらその言葉に潰されていたかもしれない」

「……」

「それに高橋は『明日があるさ』という人間だ。難しいことは明日まわしにするだろう」

「でも、明後日まわしにはしないよ」

「そうかな？」そう言う谷口の顔は笑っていた。

（それにしても、あの人達は私よりも数段タフだった）とおもう。

去年の二月、私が乗り合わせたイスタンブールからブルガリアを経由してルーマニアの首都ブカレストへむかう夜行バスは、私の他には旅行者の姿はまったくなく、豊かなイスタンブールに買い出しにでかけ、制限いっぱい買い込んだ物資を自国に持ち帰ろうとしているルーマニア人の男女で満杯だった。座席の下のバスの荷物格納庫は、そんな彼らが買い出したさまざまな物で溢れていた。何百キロメートルにわたってブルガリアとルーマニアを隔てている国境の大河ドナウ川には橋は架かっている。渡し船でバスごと夜のドナウ川を渡り終えると、すぐルーマニア国境警備隊によるパスポートコントロールがあった。まだ日が昇る前の暗闇のなか、国境警備隊の命令で、荷物格納庫にあった物資がすべて引き出され空き地に並べられた。氷点下の外気は凍えるように寒い。しかし、国境警備隊の厳しい荷物検査にも彼らはびくともしない。難癖をつけるオフィサーにくっつかかる三十代の美しい女性もいた。

連帯感のある彼らと過した約十四時間のバスの旅は、どんな状況下におかれても「生きよ！」という熱いメッセージを受け取った旅であった。彼らとパスポートをみせあった思い出は忘れられない。私に「おまえ、よく旅をしているな」と言いたげな男のパスポートは、何回も往復しているだろうトルコ、ブル

ガリア、ルーマニアなど近隣諸国の出入国のスタンプでいっぱいだった。

（私の親達の世代の苦労は彼ら以上だったはずだ）とおもう。

私の父は敗戦直後に飛行機の整備兵として外地にいたため北朝鮮抑留を経験している。仲間の三分の二が収容所で亡くなったと言っていた。

敗戦直後と言えば、母は十代後半、父は二十代前半、祖父母は今の私の年齢よりまだ若かったろう。そんな人達が敗戦直後の地獄をくぐり抜けてきているのだ。

メールをチェックすると、モハメッドからメールがはいっていた。メールも日本語で書かれている。

「火曜日から大阪に来ています。

昨日は念願だった高野山に行ってきました。大門からはいり壇上伽藍を散策し、奥の院まで行ってきました。朱色もあざやかな根本大塔の偉容は期待した以上に素晴らしいものでした。まさに日本のモスクですね。

一の橋を渡り奥の院にはいり石畳の参道をしばらく歩くと弘法大師御廟の手前に灯籠堂がありました。堂内の天井をうめつくした灯籠の美しさは峻厳そのものでした。

さて、昨日高野山で綺麗な女性と出逢いました。オーストラリアの方で親友を亡くして悲しみにくれているとのことです。しばらく彼女と一緒に旅をつづけたいとおもっています。今日はこれからふたりで比叡山に行くつもりです。

あなたのホームページをみつけたので読んでみました。その話は今度会ったときにしますね。あなたがナチスドイツの空爆のあった四月二六日にゲルニカにいたとは…、びっくりしています。また、メールをします」

メールの発信時刻は午前八時十一分だった。

（オーストラリア人？ スーザンか？ いや、彼女は親友を亡くしたわけではないから違うな）

「私はいい旅をつづけてください」とモハメッドにごく簡単な返信を送った。

（モハメッドはホームページをみたのか）私は少し恥ずかしくなっていました。

ホームページのURLは、メールアドレスから容易に想像できるのだからみつかっても仕方がない。

（それにしても変わった奴だな）

ゲルニカ：このバスクの小さな田舎町には、日本人が忘れてしまった政治の季節がまだ脈々と息づいている。ゲルニカで目立つのはバスク語で書かれた横断幕だ。バスク語をしゃべれない私にはそこに何と書かれてあるのかわからないが、彼らのつよい民族意識はその布切れに書かれた文字からひしひしと伝わってくる。そして何故か、この横断幕が私に六十年代後半の学生運動の熱狂を

おもいださせるのだ。

時代を変えるのは狂気の力だ。

薩長の下級武士が徳川幕府に勝利した幕末の動乱も、熱い思いだけで行動を起こしてしまった青年将校達によるあまりに杜撰なクーデター事件（二二六事件）も、そして最後には全共闘が時の政府に敗れ去ったとはいえ六十年代・七十年代の学生運動も、思想の違いはあるとはいえ、熱狂という面では同じ質のものだ。そこには野性の横溢があった。

「今の日本は無感動で、熱狂がない社会だ」と谷口が言っていた。

（学生運動の敗北が、日本人を大人しい子羊にしまったのだろうか）

バスケットという日本でも名前が知られているのは、ETA（Euskadi Ta Askatasuna／バスケットと自由）というバスケットの解放を主張する政治結社だろう。スカパーをとおして日本で視聴することができるTVE（スペイン国営放送）のニュースをみている限り、現在では、凶悪なテロリスト集団と化してしまっただけのあるこのグループにも、四十年近くつづいた、フランコ総統によるバスケット弾圧の時代にはつよい存在理由があった。しかし、一九七五年にフランコ総統のあとを継いだファン・カルロス現国王がすすめた、「多様なスペイン」を肯定する民主化政策によって、バスケットの自治も認められスペインは大きく変わった。現在のスペインは日本よりはるかに民主主義が進んだ国だ。

そして、今、ETAの存在意義が揺らいでいる。

明治維新の元勳たちも、元は時代の変革という夢に取り憑かれた、過激なテロリストたちだったことを私はおもいだしていた。時代が彼らを偉大な指導者にもするし、醜悪な犯罪者にもする。

私はモハメッドからのメールをふたたびみていた。

（四月二六日か……。六十七年前、空爆のあったこの日にゲルニカにいたことは偶然にすぎないのだよ）私は彼に心のなかで語りかけていた。

あとで「ゲルニカ空爆」について書かれたホームページをみて、初めてそうだったのかと気がついたただだったのである。

翌日、木曜日の午後七時、私は「Nottingham」にゆく前、六本木ヒルズの近くけやき坂のそばにある、ブックストアと融合しているスタイルの「STARBUCKS COFFEE」にいた。私はいつものようにアイスカフェラテのはいったカップをテーブルの上において屋外のテラス席に座った。

けやき坂のあたりに久々に来てみると昔の面影はまったくくない。一度だけ行ったことのあるロサンジェルスを目抜き通りをおもわせる雰囲気に変貌していたのだ。

（日本人の顔をたくさんみることがなければ、とてもここが日本だとはおもえないな）

ポール・オースターの『リヴァイアサン』を読んでいた私が、そろそろ「Nottingham」に行こうと立ち上がるうとした瞬間、谷口優一の妻、坂口泰子さんが子供ふたりをつれてこちらに向かってくるのに気付いた。二十メートルほど先から彼女は私にむけて手を振っていた。

谷口は泰子さんと結婚するまでは、海外を飛び回っていたフリーのジャーナリストだった。彼らは十五年前インドで出逢った。ヒンズー教の聖地、バラナシに行くため谷口がデリーで夜行の寝台列車に乗ったとき同じ列車に乗り合わせたのが当時まだ二十三歳だった泰子さんだった。

インドの列車の陣取り合戦のものの凄さを、谷口は、子供に昔話をするように私に話してくれたことがある。

「高橋、インドの寝台列車っておちおち眠ってもいられないのだぞ。日中は物乞いや無銭乗車の客がほとんど紛れ込んでくるし、トイレに行こうものならその隙をねらわれ、どこの誰かもわからないやつに席をとられていて、戻ってみたらそこは何十年も前から自分の場所だという顔をされるのだ。そんなとき席を取り戻すのにどれほどのエネルギーをつかうかわからない。だから、列車に乗ったらすぐそばにいる連中とできるだけ仲良くし顔を覚えてもらわなければならない。それに、夜、気がつくときと床とか網棚に人が寝ているのだ。足の踏み場もないとはまさにこのことをいうのだと初めておもった」

それで、谷口と泰子さんが知り合ったのは、そのことに慣れていない泰子さんを谷口が助けたからだとはばかりおもっていたら、泰子さん曰く「席をとられて困っていた谷口を、隣りのコンパートメントにいて一部始終をみていた私が、席泥棒のインド人をヒンズー語で一喝して助けたのが、きっかけだったのよ」というから人生はわからない。谷口にその話しをしても、プライドがじゃましてか、へへんと鼻で笑うだけで、まともに取り合ってはくれないが。

ところが、去年彼らの家族や泰子さんの仕事仲間達と私がインドに初めて行ったとき、谷口のインドの列車は大変だという話しが、すでに昔日のものとなっていたことがわかった。つまり、インドの列車もコンピュータが導入され完全指定席制になっていて、始発駅では列車の入りに席取り表が張り出されており、噂にきいていた凄惨な陣取り合戦はすでになくなっていたのである。もちろん、物乞いや無銭乗車が皆無になったわけではないが、谷口はまるで別の国に來たようだと言っていた。また、泰子さんはインドの醍醐味がなくなってしまうたと嘆いていた。

しかし、泰子さんの仕事仲間達にとってはそれでも驚きの連続だったようだ。

始発のデリー駅のプラットホームでは、破傷風でパンパンになった左足を見せて回っている物乞いからまねたり、列車のなかにはいると両足がないので台車にのり乗客からバクシーシー（寄付金）を集めている男に怒鳴られたりしたからだ。きわめつけは終着のバラナシ駅で、早朝に着いた列車から降りると、駅のプラットホームには、今しがた息を引き取ったとおもわれる男の死体が、犬や猫の死体のように転がっていて、誰もそれを処置しようとする雰囲気のないことだった。

死体が放置されるのはいいいことではないが、（インドは死が身近にあるのだな）と私は感じた。

この死体を目撃すれば人の生命というものがいかにこわれもので、ちょっとしたことでいとも簡単に奪われるものだというのがよくわかる。ところが日本では、死は多くの人の目から隠され、すでに身近なものではなくなってしまっている。

われわれは昔のように自宅ではなく病院で死んでゆく。そして多くの場合、他の病人も寝泊まりしている一般病棟の大部屋ではなく、隔離病棟のようなところにある個室に移されて死に、人目につかない従業員用のエレベーターで裏口にはこぼれ、そこで寝台車に乗せられて、まるで不浄門から退出させられるかのようにひそかに病院をだされてしまうのである。自宅にはもどらずそのまま葬儀場の冷蔵庫に搬入されてしまう場合すらあるのだ。

核家族化がすすんだ今、子供達の身近にある死といえば、TVゲームのキャラクターの死ぐらいかもしれない。それもリセットすれば生き返ってしまうのである。

（死は身近になればならない）と私はおもう。

身近にあれば、生命の尊さが理解できるし、肉親の死を目撃することで自分の死生観が養われ、かえって死が恐くなくなるのである。

泰子さんとふたりの子供は、私の目の前にすわった。

「何か飲む。おごるよ」と私は言った。

「ねえ、雅さんがおごってくれるんだって、何にする」と彼女は子供達に言った。

私は子供達にはフラペチーノ、泰子さんにはエスプレッソを持ってきた。

「ねえ、雅…」と泰子さんは話し始めた。「もう私、谷口をしばらくつけるわけにはいかないとおもうの」

「どうして」

「いつまでも翻訳者にしておくのはどうかとおもっているの」

「翻訳者だって立派な職業だよ」

「そうだけれど。あの人の望みはミステリー小説の翻訳者になることかジャーナリストになることだった」

「そうだね」

「私、ミステリー小説の翻訳者になりたいというあの人のつよい願望を知っていたから、ずっと一緒にいたかったこともあって、あえて彼にとってより達成可能だったジャーナリストの道のほうをすすてさせたの」

（それが間違いだったんだよ）と私はおもったが、泰子さんには言わなかった。

十三年前彼らが結婚したとき、プロポーズした谷口に泰子さんが提示した結婚の条件は、喫煙をやめることと取材のためとはいえ危険地帯に行かないことだった。最初の条件にはすぐ快諾した彼も、ふたつめの条件には難色をしめした。ジャーナリストとしての生命線だったからである。そのかわりオーナー企業の経営者である実父から商才を受け継いでいた彼女は、二十五歳にしてすでに実業家として頭角を顕わし始めていて、海外のミステリー小説の翻訳者になりたいという彼のもうひとつの夢をサポートできる立場にいた。

数ヶ月にもおよぶ湾岸戦争の取材からもどってきた谷口は、その年の四月、泰子さんと結婚した。そしてジャーナリストをやめ海外のミステリー小説の翻訳者をめざしたのだった。

「でもあの人には小説の翻訳者になるには才能がなかった」と泰子さんはつづけた。

「そうだね」

「で、今こんな政治状況でしょう。もう一度ジャーナリストにもどりたいう谷口の気持ち痛いほどわかるのよ」

「あいつがそう言っているの」

「あの人は私に何も言わないけれど、私にはわかるの」

「谷口にとつてジャーナリストにもどるにはこの十三年のブランクは大きいかもしれないよ」

「そうね」泰子さんは少しうつむいた。

「それに、あいつが日本にいない時間がふえとなると、子供の世話はどうするの」

「それは母が来てくれるわ。母と一緒に住むのを楽しみにしているの」

「そうか…」

泰子さんの母、芙美子さんは、今年の二月に亡くなった泰子さんの父、栄一氏の後妻で、泰子さんは彼女が十八歳のときの子供だからまだ五十六歳と若く、先妻の子である泰子さんの異母兄弟達とほぼ同世代であった。

栄一氏の先妻は、栄一氏と三十年程前に離婚したとはいえ、八十歳を過ぎて



もまだまだ豊饒（かくしゃく）としているので、泰子さんは他の異母兄弟達と微妙な確執状態にあった。事実、彼女は実業家としてすでに成功しているものの、栄一氏が戦後作り上げたコンツェルンとは一線を画していたのである。

「それにそろそろこのアパートメントもでなければいけないし…」

「どうして」

「どうしてって、家賃が高すぎるからよ」

「分譲じゃなかったの」

「あそこは全室、賃貸よ。具合が悪くなった父が母と一緒に住んでいたからそばに引っ越してきただけなのよ」

「そうだったのか」

「いくら父の具合が悪かったからって、何であんな高いところに住むのかって、谷口、雅にもうるさく言っていたでしょう？」

「いや、私には何も言っていなかったよ」と私は嘘をついた。

「そう…」

（「嘘をつくなんて、意味がない」と谷口は言うかもしれないな）と私はおもった。

「で、スーザンとエリックの夫婦はどうなるの」

「まだわからない。明日、エリックが東京に来てからの話しだとおもう」

「あれ？ 日本に来られるのは土曜日じゃなかったの」

「一日早くこっちに来られるようになったのだそうだ」

今朝コンピュータを立ち上げると、エリックからメールがはいっていた。送信日は昨日の午後十一時五十分だった。

『予定より少し早くこっちのことが片付きそうになってきたので、土曜日ではなく明後日金曜日には、東京に行けるものとおもう。今日飛行機の予約をいれた。到着時刻は夕方の予定です』

「スーザンってどんな女性なの」と泰子さんがきいた。

「赤ん坊が好きな人だ」

「赤ん坊？」

「エリックの話によると以前病院で働いていたときには産科にいたそうだ」

「そうなの」

「生命の誕生の場に立ち会うのが好きなのだと彼女自身も言っていた」

「エリックとのあいだに子供は？」

「できないのだそうだ」

「そう。で、何故病院をやめたの」

「それは私にはよくわからない。智子さんに言わせると、新生児の担当からガ

ン患者の担当に変わったことが引き金じゃないかと言っていたけれど…」

「姉さんがそう言っていたの」

「そう」

しばらく考え事をしてから、泰子さんはこう私にきいた、

「感情の起伏の激しい人だときいたけれど…」

「私は一週間ほど一緒にいただけだから本当のところはよくわからないけれど、エリックによるといろいろなことによく涙を流したり、怒ったりするそうだ」

「例えば？」

「日本人は何故ちよつと肩が触れたくらいで凄いい目をするのとかかなり怒っていたことがあるそうだ」

「日本に来たことがあるの」

「今回の前に一回だけね。ショーンという友人がいるので、エリックと少し諍いを起こすと気を鎮めるためによくショーンのところに行くのだそうだ」

「彼女のゲイの親友ね」

「よく知っているね？」

「谷口は何でも話してくれるから」

「以前はショーンがシンガポールにいたのでしょつちゅう彼に会いに行っていたようなのだけれど、ショーンが日本に転勤になってからはさすがに回数が減つて今回が二回目なのだそうだ」

「何かあるとすぐ実家に帰つてしまう妻みたいなものね」

「そうだね」

「話しは変わるけれど、何で雅さんはせっかくスーザンをみつけたのに、彼女を私達の家にあずけようとは考えなかったの。雅さんの家に泊まってもらうのは無理でも、私達の家ならそれができたのよ」

「……」

「谷口が『あいつは気が利かない』と怒っていたわ」

「そうか、その手があったか。気がつかなかった」

「すんでしまったことをくやんでも仕方がないことだけれど」 泰子さんは優しい顔を私にむけた。

「今度は気をつける」

「ふたりの仲がもとにもどるといいね」

「そうだね」

翌日、金曜日の午後八時過ぎ、エリックから電話がはいった。

「今、JR信濃町駅に到着した」

（流石に旅慣れているな。私の簡単な説明だけで迷うことなく目的の場所にほぼ時間通りに到着するなんて）

私はすぐ迎えにでて、エリックを1DKの自分の家に案内した。彼は私の足を確認してあわてて玄関で靴を脱ぎ、本の山にかこまれた部屋にはいると、カーペット敷の床におそるおそるあぐらをかいてすわった。私はキッチンにゆき冷蔵庫からビールを取り出し、小さな座卓の上に置いたふたつのグラスに注ぎ、まず無事の到着を祝って乾杯した。

『小さい家だろう？』と私は英語で言った。

『雅がひとりで住んでいるのだから』エリックは八畳ほどの部屋を見回していた。『それより、きいてはいたが、靴を脱いであがることやベッドがないことなどにはやっぱりびっくりさせられた。でも、まさかイスまでないとはおもわなかった』

『私の家にはいだけでイスや西洋式のテーブルがある家は今では多いよ。それに布団じゃなくてベッドの家もかなりある』

『そうなのか』

『でも靴を脱がないでいい家はないとおもうけれど』

エリックは小さく笑った。

『それで、明日から京都に行くのか』

『行く。京都に行ったというのがわかっていいるのだから』

『でも私がスーザンに会ってから五日もたっているんだよ。東京にもどってきているということも考えられる』

『……』

『ショーンが東京にもどってくるのはいつ頃になりそうなのですか』

『来週の水曜日になるとのことだ』

『スーザンが携帯電話をつかってメールを送れるということは、ショーンと連絡をとっているかもしれないね』

『そうかも知れない。ただ、その場合はショーンから私宛にメールがはいることになっている』

『そうか。もし疲れてなければ今からサクラヤ旅館に行ってみないか』

『OK。その前にシャワーを浴びさせてくれ』

『わかった』

エリックはシャワーを浴びたあと私のコンピュータでホットメールのページにゆき自分宛にメールがはいっていないかどうかをチェックした。彼は自宅につかっているメールアドレス宛のメールを、すべてホットメールのメールアドレス宛にも届くよう転送の手続きをしておいたのだ。

エリックと私は、信濃町駅からJR総武線に乗り新宿にゆき、サクラヤ旅館に行った。来月六十歳になるという女将さんが応対にでてきた。品のいい小柄な女性で英語がぺらぺらだった。

『私のワイフが少し前にこちらに泊まっていたはずなのですが…』エリックは彼女の名前をつけ一緒に写っている写真を女将さんにみせた。

『お泊まりになられていました』

『実は私と夫婦喧嘩しまして家をでてしまったのです』

『そうですか。それは大変ですね』

『いつ頃東京にもどつてくると言っていました？』

『もどつてこられる前に予約の電話をしないとおっしゃっていました』

『もどつてきたら私に連絡していただけますか』

『申し訳ありませんがそれはできません。奥様から電話があった際、あなたがここを訪ねてきたということはお知らせします。それでよろしいですか』

『どうしても知らせてはいただけないのですか』

『あなたがそうだというわけではないのですが、旦那さんから逃げてきたという女性も多いのです』

『そうですか。それでは、電話があった際私が訪ねてきたというのは言わなくても結構です。そのかわりこの手紙を彼女がこちらにもどつてきたとき渡してください』

『承りました』

エリックは用意してきた手紙を女将さんに渡した。

私達ふたりはサクラヤ旅館を辞した。

『ずいぶんと用意がいいんだね』と私は言った。

『彼女は怒ると私の言うことをきいてくれないことも多い。そういう場合は手紙にかざるんだ』

『そうか。でも少しわがままがすぎるんじゃないのか』

『違う！ そうじゃないんだ』

『……』

『雅はあのおきも「バックパックを少し壊されたくらいで…」と言っていたが、あのバックパックは彼女の兄さんの遺品だ。スーザンの海外旅行好きは二年前に亡くなった兄さんゆずりなんだよ。彼女は命あるものの死に耐えられない』

『……』

エリックはこのあと『だから同じ産婦人科でも、ガン病棟に異動させられたとき、病院もやめてしまったのだ』とつぶやいたのだが、すれ違った外国人の女性にスーザンかと一瞬目をうばわれ、私はその言葉をしっかりきいていなか

った。

『どうした』とエリックがきいた。

『いや、何でもない。で、今日はこれからどうする』

『六本木に行ってみよう。雅にこの前会ったから、もしすでに東京にもどってきているとしても、サクラヤ旅館には泊まらない可能性もある』

『そうだな』

私達ふたりは都営大江戸線の代々木駅まで歩き、電車に乗って六本木に行った。まず「Nottingham」にゆきスーザンが来ていないのを確認すると、「Nottingham」の近くのビルの二階にあり窓際にすわればガラスごしに往来をみわたせるに居酒屋にはいった。この店は飲み物・食べ物すべて一律三百円というのがうれしい。居酒屋を選んだ理由は、往来をみわたせるというのが一番だが、エリックが日本まできて西洋式の店にゆく必要はないとのひとことであつた。

『そろそろスーザンとのあいだに何があつたのかきかせてくれないか』

『彼女の親友が死んだ。自殺だつた。スーザンはそれに私が関わりあいがあると言ふんだ』

『で、本当に関わりあいがあるの』

『ある』

『どういうふうに』

『その女性と私は十年前につきあっていた』

『……』

『彼女に結婚しようと言われたのだがあの頃私はまだ若かつたのでことわつた。そうしたらしばらくしたら仲が上手くゆかなくなり三ヶ月後には別れることになつてしまつたんだ』

『……』

『それがスーザンの親友になつていたなんてびっくりだよ』

『彼女はどうして自殺をしたの』

『鬱病だつたんだそうだ』

『どうしてそれがわかつたの。スーザンからきいたの』

『いや、彼女の弟と私が幼友達だつた。それで彼に電話をして事情をきいたんだ』

『そうか。そうすると彼女も彼女の弟もスウェーデン人ということだよね』

『そうだよ。彼女とのことは私がオーストラリアに移民する前のことだ』

『エリックはいつ移民したの』

『私が移民したのは九年前のことだ』

『彼女と別れたほぼ直後ということだね』

『そういうことになる』

『嫌なことをきくけれど、上手くゆかなくなった彼女から逃げ出したかったの』

『まさか！ そうじゃない。彼女からの結婚の申し込みと移民の話は同時進行だったのだ』

『……』

『……』

『もうひとつ嫌なことをきくけれど、エリックとしては結婚より移民を優先させたわけだね』

『彼女は私の移民には反対だった』エリックはつぶやくように言った。

『移民問題が彼女との仲が上手くゆかなくなった大きな原因だったの』

『それもあるだろうけれど、当時の私はまだ結婚することに自信が持てなかったんだよ』

『まだ遊び足りなかった？』

『そこまではつきり言うなよ。あのとき結婚をせまる彼女が重荷になってしまったのは事実だけれど…』

『ごめん』

『オーストラリアに移民して数年がたち生活が安定したんだ。これなら彼女ともう一度やり直せるとおもってまず彼女の弟に電話をしたんだ。そしたら…』

『そしたら？』

『彼女はすでに別の人と結婚していた』

『そうか』

石野と同じだとエリックの話をきいておもった。大学卒業直後、石野は大学時代の恋人から結婚をせまられたのだが、「まだ遊び足りないとおもい『今はまだ結婚する自信がない』と言って断ったところ、その女性とはそれから急に仲が上手くゆかなくなった」と言っていた。彼は二十六歳のとき別の女性と結婚し、三十三歳のとき離婚した。そしてその痛手から逃れるために大阪から東京にでてきたのだが、「あのとき大学時代の恋人と結婚していればよかった」と酔うと今でも言うことがある。

『それで、どこでスーザンと彼女は知り合ったの。旅先で？』と私はきいた。

『いや、ふたりとも看護婦でスーザンがスウェーデンの病院で働いていたことがあるんだ。彼女も同じ病院に勤めていたんだそうだ』

『しかし、もの凄い偶然だね』

『本当にびっくりしている』

『EU統合の影響？』

『そうともいえる。スウェーデンがEUに加盟したのは一九九五年のことだというのは知っているよね』

『九年前じゃないか。スウェーデンのEU加盟ってそんな最近のことなの』

『そうだよ』

『いつスーザンと彼女が友人だって知ったの』

『去年私達が世界旅行をしたのは知っているよね』

『知っている。私もモロッコで一週間一緒に旅したよね』

『そうだったね。結婚したときにはお互いの両親だけをオーストラリアへよんでささやかなパーティをただけだったので、お披露目をかねて旅の最後にイングランドとスウェーデンに行ったんだ』

『スウェーデンではスーザンが、サプライズがあると言っていたんだ。それで楽しみにしていたんだけど』

『……』

『スウェーデン人のしかも私と同郷の友人がいることを知らせておどろかそうということだったんだが、それが彼女だったんだ。スーザンにはその夜の夜、彼女と以前つきあっていたことを告白した。隠し通せるわけがないからね。それに私のなかではすでに彼女は過去の人だったし……』

『それから？』(過去の人？ エリックって結構さめているんだ)

『私達のスウェーデン滞在中は何もなかった。彼女も結婚していたしね。ところが、私達が帰ってしばらくしてから彼女のひとり息子が交通事故にあい死に……、夫婦仲もおかしくなってから彼女が変になってしまったんだ』

『……』

『今年になってから、エリックをかえしてというメールが毎日のようにはいってきたそうだ』

『それをいつ知ったの』

『スーザンが彼女の葬式から帰ってきてからだ』

『エリックは葬式に行かなかったの』

『彼女の弟から電話がはいり、彼女の夫が私に恨みをもっているようだから来るのは遠慮してくれという連絡がはいったので、とりやめにしたんだ』

『そうか』(そこで逃げたのが失敗だったんだよ、エリック)

『スーザンには何故一緒に行けないの、と何度もなじられたけれど……』

『つらいね』

『つらいよ。スーザンにはこうも言われたんだ。「何であのか彼女の気持ち」を大事にしてあげられなかったの？ 彼女はあなたにとって宝物だったはず

よ」って。「私の宝物は君だ」と答えたのだけれど、ただ哀しい目を私にむけるだけだった』

『……』

『……』

私は少し迷ったすえ、

『一緒に行っていればこういうことにはならなかった』と言った。

『そこまで言うなよ。雅の言いたいことはわかるけれど』

『わかった』

『彼女ほど心が優しい人間はいない。そして人一倍傷つきやすい。だから今度こそ私が彼女をまもってやらなければならないんだ』

（わかるよ。でも、スーザンの行動にいつも一番戸惑い傷ついているのはエリックあなたでしょう）と私はおもったが言わなかった。

六本木を早めにきりあげエリックと一緒に歩いて国立競技場のそばの自宅に帰った。明日一番の新幹線でエリックと京都に行くためだ。

私はエリックに、今週の月曜日に京都の書店で買った「Lonely Planet/Kyoto」をみせ、「スーザンは京都のどこににいるのだろうか」ときいた。しばらく「Lonely Planet/Kyoto」のページをめくっていた彼は、

『スーザンはまず鞍馬に行くだろう』と言った。

『何故』

『彼女は山歩きが好きだ』

『……』

『そして次の日は比叡山にゆくとおもう』

『何故比叡山が先じゃないの』

『鞍馬の近くには貴船という日本の伝統的な旅館があつまった町があるよ、雅ほら』

エリックは「Lonely Planet/Kyoto」の鞍馬・貴船エリアについての記述を私にみせた。

『そのあとは？ 今はどこにいますとおもう』

『それは私にもわからない。彼女が京都に行ってからすでに五日たっているから。今頃は京都ではなく大阪や神戸、もしかしたら有名なお城のある姫路のほうにいるのかも知れない』

『姫路？』

エリックは自分のバックパックのなかから「Lonely Planet/Kyoto」を取り出して私にみせた。私が彼の「Lonely Planet/Kyoto」を手に取りめくってみると、鞍馬・貴船、比叡山…、そしてうしろの「Excursions（小旅行）」セクションに



載っている姫路をはじめとして、いくつかの箇所ですでに付箋が貼ってあった。

『じゃ、明日は大阪に宿をとってまず姫路に行ってみよう』と私は言った。

『いや。雅、やはり京都の寺めぐりのほうが最初だとおもう』

『わかった』

寝る前にメールをチェックするとモハメッドからメールがはいっていた。

「明日、東京に帰ります。今週ずっと一緒に旅をした女性も一緒です。今日ホテルの近くにある『Nottingham』でアラビア語をしゃべる日本人と出逢いました。向こうからアラビア語の練習をしたいと声をかけてきたのです。面白い人です。彼とは偶然にも泊まっているホテルが一緒でした。明日、四人で六本木の『Nottingham』で会いませんか」

（アラビア語をしゃべる面白い日本人？ 谷口のことか）

私は「Nottingham」のホームページに行き、梅田店の場所を確認した。何と谷口の大阪での常宿の近くではないか。大阪にも友人が多い谷口の常宿は太融寺の裏にある「大阪ゲストハウス」だった。ここは値段が安いこともあって外国人バックパッカーもよく泊まっている。

（モハメッドもバックパッカーだったのか？）

私はモハメッド宛にいそいで返信を送った。

「もしかしてアラビア語しゃべるといふ日本人の名前は谷口というのではないですか。もしそうなら、彼は私の友人で、今、大阪にいます。彼の常宿は『大阪ゲストハウス』です。

オーストラリアから友人が来たので明日ふたりで京都にゆきます。京都に重要な用事があるのです。入れ違いになってしまいますね。残念ですがお会いするのは、またの機会とさせていただきます」

モハメッドと一緒に帰ってくるというオーストラリア人の女性のことを、私はすっかり忘れていた。

翌日の土曜日、エリックと私のふたりは早朝の新幹線に乗り京都にむかった。

新幹線が新大阪駅に到着しようかとしている頃、私の携帯電話がなった。谷口からだ。

「高橋か。今どこにいる」

「そろそろ大阪に着く頃だ」

「大阪？ 東京じゃないのか。まあいい。新大阪で降りて、すぐ東京にもどる列車に乗れ」

「どうしてだ」

「スーザンと一緒にいる」

「えっ！」

「今、スーザンと一緒にいるって言ってるんだ」

「おまえは今どこだ」

「名古屋の駅をでてしばらくたったところだ。もう東京に行くしかない」

「電話でエリックにスーザンと話させてくれないか」

スーザンという名をきいて、エリックがこっちをみた。

「彼女が電話では話したくないと言ってるんだ。あとで東京での待ち合わせ場所をおしえる。高橋、悪いけれど電話をきるぞ」

谷口は電話をきった。

『エリック、スーザンは今名古屋をでて東京にむかっているそうだ』

『東京に？』

『そうだ。大阪に行っていた親友の谷口から電話がはいった。スーザンは、今、谷口と一緒にいる』

『わかった。すぐ東京にもどろう』

谷口から私の携帯電話にメールがはいった。

ー東京駅の銀の鈴で待つ。

新大阪駅から東京にむかって引き返したエリックと私は、午後一時ちょっと前に東京駅に到着した。

銀の鈴のそばでたたずんでいたスーザンに、バックパックを私にあずけたエリックがゆっくりゆっくり近づいて行った。エリックが静かに、そして優しくスーザンを抱いた。

「高橋、ふたりの邪魔をするな」

ふたりに引き寄せられるようにして無意識に歩みをすすめていた私の耳元に、谷口の囁き声が飛び込んできた。谷口、モハメッドと私の三人は、ふたりから離れた位置に移動した。

モハメッドは私にスーザンとの対話の内容を話してくれた。谷口はそばで私達の会話を見守っていた。

「彼女はマリアを親友としてだけでなく仕事上の先輩としても尊敬していたのです。彼女がスウェーデンをはなれイングランドにもどっても、そして結婚が決まってエリックのいるオーストラリアに行っても、メールや国際電話をつうじて常に連絡をとり、マリアは相談相手として非常に大切な人でした」

（そうか、名前はマリアというんだ）

「でもどうしてマリアは、エリックが自分の前の彼氏だったということ、スーザンに伝えなかったの。伝えていれば展開は変わったはずだよ。スーザンか

らエリックという名前もきているだろうし、自分と同郷ということも、オーストラリアに移民した人だというの…。彼女はすべてをわかっていたはずですが」

「それが女性の心の複雑さではないのですか」

「……」

「マリアは理想の男性像をスーザンに深夜よく話してきかせたそうです」

「深夜？」

「スーザンが六年前ストックホルムの病院で働いていたとき、彼女達ふたりは同じアパートメントをシェアしていたのです」

「なるほど」

「その話しのなかではその男性、デイビットはすでに飛行機事故で死んだ人になっていた。だから、彼の容姿から立ち振る舞い、彼の言動、彼の思想、そして男性としての優しさを、いろいろ話をふくらまして伝えていた…。つまりエリックとの楽しかった日々を回想しながら彼女に伝えていたのです」

「マリアに心酔していたスーザンのなかでも同じようにまだみぬエリックが理想の男性像になっていたというわけですね」

「そうです」

「そのなかで極めつけはふたりの出逢いのシーンです。マリアは彼女にとって完璧な男性だったエリックが高所恐怖症であることをある事件で知り、逆になおいつそう彼のことがいとおしくなりました」

「どんな事件だったのですか」

「マリアとエリックがふたりで行った最初で最後の海外旅行が、トルコのイスタンブールでした。それも冬のイスタンブールです」

私のなかに、イスタンブールの景色がよみがえってきた。イスタンブールはボスポラス海峡をはさんでヨーロッパとアジアが目に見える距離で対峙している場所に位置している。ふたつの大陸にはさまれたボスポラス海峡は、海峡というよりまるで大河だ。いにしえから文明の十字路といわれ、一四五三年東ローマ帝国がオスマン・トルコに滅ぼされるまでは、帝国の首都としてコンスタンチノーブルの名でよばれていた。

地図の上では、西にヨーロッパ大陸、東にアジア大陸、北に黒海そして南にマルマラ海があり、黒海とマルマラ海のあいだを南北につないでいるのがボスポラス海峡である。南のマルマラ海への出口近くで、ヨーロッパ大陸を南北に引き裂くようにして西に、海の水が、動物の角の形のように深く入り込んでいる。その大きな川のような水路は、英語で Golden Horn（金の角）、日本語では金角湾とよばれている。金角湾の北側にあるのが新市街、南側にあるのが旧市街で、

新市街と旧市街をつないでいる橋のひとつが有名なガラタ橋である。バックパッカーの拠点、スルタンアフメットは旧市街にあり、広場をはさみイスラム文化の象徴であるブルーモスクとオスマン・トルコに滅ぼされた東ローマ帝国の象徴、アヤソフィア寺院が対峙している。

そのガラタ橋を渡り、旧市街から新市街にゆき、対岸からイスタンブールの旧市街を見渡すと目の前に広がるのは、そこかしこに点在するブルーモスクをはじめとする巨大なモスク群の偉容である。そして夕方、イスラムのお祈りの時間をつげるアザーンの響きが流れると、まさに異国にいることをひしひしと感じる。

「イスタンブールですか……。私も大好きです」

「雅はガラタ塔に行かれたことはありますか。それも冬の」

「冬のガラタ塔は知りません。ガラタ塔からみるイスタンブールの海の景色は絶品ですから、行きたびに必ずガラタ塔には行っていました。前回二月にイスタンブールに行ったときは滞在期間が短かったこともあり行きませんでした」

ガラタ塔はガラタ橋を渡った新市街側の、左手の急な坂をあがりしばらくゆくとある円筒形のさほど高くない石造りの塔で、東京タワーやエッフェル塔とは違い旧時代のおもむきがある。最上階にある食堂のわきから屋外にでると、塔の周囲をかこむようにして円形の見晴し台がある。ここからイスタンブールの東西南北すべてが見渡せるのである。

「そうですか。冬、ガラタ塔のパノラマ・バルコニーの日の当たらない部分の床が凍り付くことは知っていますか」

冬のイスタンブールは、雨のイスタンブールである。晴れるのは一週間のうち二日もあればいいほうで、ほとんど一日中霧のような氷雨が降っている。そのなかをイスタンブールの人達はみんな傘もささずに歩いているのである。

冬、寒さのため床が凍り付き非常に滑りやすくなった、ガラタ塔のあの吹きさらしの見晴し台で、派手に転ぶ自分の姿が一瞬あたまたに浮かび、私はぶるつと震え、おもわず「うっ」と叫んだ。

「雅、あなたは想像力がたくましくすぎます」モハメッドは苦笑いしていた。

「……」

「エリックはまさにガラタ塔のそのパノラマ・バルコニーでスッテーンと転んだのですよ。二月十四日の午後一時ことです」

「うわ！」

「マリアはそのおろおろとした姿をみて、なおさらエリックのことがいとおしくなってしまったそうです」

「女性ってわからないね」

「そうですね。それでスウェーデンに帰ってからマリアのほうからプロポーズしたそうです」

「で、まだ若く心の準備ができていなかったエリックにすげなく断られてしまい、かなり傷ついてしまったというわけですね」

「そうです」

「そのイスタンブールでの出来事をマリアは、彼女が作り上げた理想の男性であるデビットとの、旅先での運命の出逢いのシーンとして、スーザンに話しているのです」

「なるほど」

「それとあとひとつ。スーザンとエリックの出逢いは、年は違いますが、まさに二月十四日の午後一時、しかもガラタ塔のパノラマ・バルコニーなのです。三年前のことだそうです」

「まるでハーレクインロマンスですね」

モハメッドはくすつと笑った。

「まだマリアへのおもいをたちきれないでいたエリックは、結婚したときいたマリアとの思い出の場所に、スーザンはマリアからきいた理想の男性との出逢いの場所に行っただけのことなのですが…」

エリックとスーザンが私達のいるところにもどってきた。

『モハメッド、今回はありがとう』とエリックが言った。『あなたには本当にお世話になりました』

モハメッドは右手をエリックに差し出した。エリックはその手を、自分の左手をそえるようにして右手でがっちりとにぎった。

『私達は友人です。ずっと友人です』とモハメッドは言った。

『モハメッド、本当にありがとう』

『こちらこそ』

エリックは私と谷口をみると言った。

『谷口さん、あなたにもお世話になりました』

『いいえ、こちらこそ』

『雅、いろいろありがとう』

『よかったね』

『エリック』と谷口は言った。『今日の夜、妻と一緒にジャズをききにいく予定なのです。いかがですか。私の義姉も出演します』

『お姉様はジャズ歌手なのですか』

『そうです』

『わかりました。場所をおしえてください』

谷口は店のちらしをエリックに渡した。

『雅、モハメッド、谷口さん、時間までスーザンとふたりきりで東京を歩いてみたいのですが、いいですか』

『どうぞ。私達に気を使わずに』と谷口が言った。

『ありがとう』

スーザンが私達に「ありがとうございました」と日本語で言ってお辞儀をした。

エリックとスーザンはバックパックを背負って去って行った。

「私も必ずジャズをききにいきます」と約束してくれたモハメッドと別れた谷口と私は、八重洲ブックセンターのなかにある喫茶店に行った。

ちよつと電話をしてくると言ってしばらく席を外していた谷口がもどってきた。

「誰に電話してきたの」と私はきいた。「泰子さんに？」

「ああ、まあ」谷口は生返事だった。

「ところで、エリックはモハメッドに随分感謝していたけれど、彼はどんなことをしたの」

「今日の朝、私と会ったとき、スーザンはすでにエリックと会う心の準備ができていたんだ。彼女は、エリックには何もやましいことがないことも初めからわかっていた」

「じゃ、何が問題だったの」

「スーザンの心の問題だった。彼女はマリアからエリックを奪った自分を責めていた。よく注意していればガラタ塔で出逢ったスウェーデン人は、マリアの話していた人そのものだということにすぐ気がついたはずだと」

「どうして」

「どうしてって、高橋も鈍いな」

「……」

「だから彼女はエリックを責められないとわかっていた。だけど、何故マリアとのことをもっと早く打ち明けてくれなかったの、とエリックに怒りの矛先をむけることでしか親友を裏切った自分をなぐさめられなかったんだよ」

「スーザンはおもいつめる性格なんだね」

「そうかもね」

「それで、モハメッドの役割は？」

「彼女の話しをきいて、彼女と哀しみを共有することだった」

「ということとは」

「彼女は死んだマリアを残して、自分だけ幸せになっていいの、と自問自答していた」

「今どきめずらしい古いタイプの女性だね」

「高橋、いちいちコメントをいれないで、少しのあいだだまって私の話をきいてくれないか」

「わかった。わかった」

「スーザンはエリックが好きだ。心の底から愛してもいる。だから彼と幸せになりたい気持ちにはかわりはない。ただ、親友にたいする気持ちを整理しなければならなかった。マリアも深くエリックを愛していたのを、スーザンは承知していたわけだから」

「それで」

「それでだ。誰か自分の心のうちのすべてを話せる人をさがしていたんだ。そこで、エリックの次に心を許していた親友のひとりショーンに話をきいてもらおうと何の準備もせず東京にできたのだが、彼はアジア出張で東京にはいなかった。高橋にも偶然会ったが…、高橋じゃ話し相手として物足りなかったんだろうな。それで次善の考え方として、これは私の想像の域をでないが…、日本のなかの、神のいる場所に行ってみたとのおもう」

「つまりそれが高野山というわけか」

「そうだ」

「キリスト教徒だから、神父さんに懺悔するという考えもあるんじゃないか。ふつうそっちのほうが一般的だとおもうけれど…」

「まあ、話しをつづけさせてくれ」

「……」

「その高野山でモハメッドに、彼女は会ったんだ」

「モハメッドが声をかけたの」

「いや、彼女からだ。アラブ系の彼が日本の寺院にいるのがめずらしいとおもったらしく、興味をひかれたそうだ」

「それから？」

「話しをしてみると、彼は何でも吸収してくれる。余計なことを言わずにだまって哀しみを共有してくれることに気づいたんだ」

「ジャーナリストだから聞き上手なんじゃないか」

「ジャーナリストだからってみんなそうとは限らないし、他人の哀しみを共有してくれる人なんてそうざらにいるものではない。私や高橋にしたって、それだけの度量があるか」

「難しいな」

「そうだろう」

「……」

「モハメッドはそれができる稀有な人材なんだよ」

「……」

「それでスーザンはモハメッドにすべてを話そうと決心したんだ」

「男にはできないことだね。女性だからこそできる決断だったような気がする」

「そうかな。それで、モハメッドにきいたら最初は高野山をふたりで歩きながらいろいろ雑談をしていたそうだ。たわいもない話をね。彼女はフェズでメディナの外にある小山に登り、フェズの町を見渡したときの気持ちは忘れられないと何度もモハメッドに話したそうだ」

「なるほど。それから？」（そうか。やっぱりそうだったんだな）

「で、スーザンに私が泊まっているホテルに来ない？と言われたそうだ」

「それって、スーザンがモハメッドを誘ったということ？」

「いや、違うんだ。あなたが今泊まっているホテルは高級すぎるわよ、とスーザンに忠告されたそうだ。それでは、みえるものもみえないとね」

「さすが、バックパッカーだな」

「そうだな」

「そうすると大阪ゲストハウスにモハメッドを連れていったのは彼女か」

「そうだよ。大阪ゲストハウスは『Lonely Planet/Japan（ロンリープラネット・日本）』に載っているんだ」

「なるほど。それで合点がいった」（そうか、彼女が買ったのは、私が買った京都版や東京版ではなくて、日本版だったのか）

「私の大阪の宿の情報ソースも同じだ。で、次の日、ふたりは比叡山に行ったそうさ。それでひがな一日比叡の山を歩きながらスーザンの話をじっくりきいたらしい。朝はバスで比叡山に登り、夕方、ケーブルカーで坂本に降りたと言っていた」

比叡山と高野山は、青森の恐山と並び称される日本の三大霊場である。私は比叡山には何度か行ったことはあるが高野山に行ったことはない。石野に言わせると高野山の奥の院は壮大な墓所だそうさ。

平安仏教の二大巨人は最澄と空海である。いうまでもなく最澄が開いた山が比叡山（延暦寺）で天台宗の総本山、空海が開いた山が高野山（金剛峰寺）で真言密教の根本道場である。比叡山で修行した僧に、法然、親鸞、栄西、道元、日蓮らの鎌倉仏教の開祖達がいる。どちらも根本中堂（比叡山）、根本大塔（高



野山)と根本○○が、それぞれの山の中心になっているところは非常に興味深い。

あとでモハメッドの話をしきいたところ、ふたりは根本中堂がある比叡山の中心地域である東塔周辺ではなく、東塔から自然に溢れた修行の場である西塔、そして峰道とよばれる細い道を横川のほうへと歩いたようだ。山王院から浄土院へと苔むした石段をくだり、椿堂、にない堂をへてふたたび石段をくだるふたりの姿が目につかぶ。そして石段をくだったところにある釈迦堂の裏山に弥勒石仏と相輪とうがあったと言っていた。

比叡山を歩いていると、夏でも冷やっとして気持ちがいい。私にとって一番神の存在を感じさせたのは、根本中堂ではなく、山を覆っている昼なお暗い森のなかであった。木々のあいだからさしこむ木漏れ日の美しさは例えようもなかった。

モハメッドとスーザンはこの木漏れ日の美しいひんやりとした森のなかを、歩きつづけた。そしてふたりは峰道の途中の玉体杉とよばれる、東に琵琶湖、西に京都市街、南と北には山々のつらなりをみることができながめのよい地点で、しばらく休みそこでゆっくりと語らい、東塔のほうへ歩いてもどつていった、ときいている。

「つづけて」

「夜は彼女の部屋で、コンビニで買った海苔せんべいとウーロン茶で遅くまで語り明かしたそうだ。でもね、モハメッドに言わせると、彼のやったことは、ただ聞くことと、一緒に泣いてあげることだけしかしていない、と言うんだ。そうしたら、翌日、京都の寺まわりをし始めたあたりから彼女の表情がだんだんおだやかになってゆくのがわかったそうだ」

「そうか。しかし、私にはまねのできないことだ。恋人の悩みや愚痴なら私もきいてやれるが、赤の他人となると難しいな」

「そうだな」

「……」

「それと、モハメッドのことだがニューヨークで母親とふたりで暮らしていたとき、彼らの住んでいるアパートメントに脅迫状が届いたり、銃弾が撃ち込まれたりしたことがあったそうだ」

「いつのことだ」

「九一一のあと、しばらくたってからのことだ」

「そうか」

谷口が急に何か言いたそうな顔をした。

「どうした」

「今週の木曜日、坂口とあったのか」

「けやき坂のスタバでね」

谷口の言う坂口とはもちろん妻の泰子さんのことである。

「そうか。で、おまえに何か言っていたか」

「いや、別に」

「何か言ってたろう？」

「フリーのジャーナリストにもどりたいんじゃないか、という件か」

「それか」

「それがどうしたんだ」

「さっき電話したら坂口らしくなく、電話口で、『ねえ、何か言うことない？』  
って私から何か言い始めるのを待っていたんだ」

（そうか、泰子さんは私からそれとなく谷口に言っただけだったのか…）

「で、らしくないんで、どうしたんだときいたら『何でもない』と言うんで、  
不思議におもっていたんだ」

「……」

「で、坂口は何て高橋に言っていたんだ」

「こんな世の中だから、おまえがジャーナリストにもどりたいんじゃないだろうかと考えていて、『私にはそれが痛いほどわかる。だから、あのと私がジャーナリストの道を断念させたのは間違いだっただのかもしれない』と言っていた」

「そのことか。そのことなら私の心のなかで解決がついていることだ」

「ならいいが…」

「それより今後は夢を追って日本から海外に飛び出してゆく人がどんどん多くなるぞ」

「この国の政治はそれほど悪いのか？」

「残念だけれど…」谷口の顔は悲しみにみちていた。

「……」

「今の若いやつらはばかじゃない。グローバル社会がここまで進化したんだ。才能のある人達は、このような状況がつづけば、どんどん日本から逃げて行ってしまうよ。その傾向はもうでているんだ。今の日本にいて、生きる意味がみつけられるか。生きているという充実感があるか」

（日本から逃げる？ それって江戸時代の農民の「逃散」と同じではないか）  
と私はおもった。

現代の農民であるサラリーマンを、もくもくと働き大人しく年貢（税金）をおさめてくれる羊のように従順な存在だとおもって侮っていると、税金をむし

やむしやと食べて肥え太っている人達にとって手酷いしっぺ返し食らう結果となるかもしれない。

しかし、一番の痛手はこれからの日本をささえていくはずの人材が日本から流出することだろう。少子化が進む日本は、魅力的な国になって海外からも優秀な人材を集めなければ国の発展はないというのに。

「逃散」とはインターネットの国語辞典（三省堂提供「大辞林 第二版」）には下記のように書いてあった。

―中世・近世、農民が耕作を放棄して他領へ移ること。多く領主に対する示威的な闘争手段として行われた。

夜がやってきた。

谷口・坂口夫婦、石野、モハメッド、エリック・スーザン夫婦と私の七人は、六本木の飯倉に近い雑居ビルの地下一階にあるジャズ・ハウス「夜はやさし」に集まっていた。七十人ほどはいる店内はすでに五十人ほどの人でうまっていた。

「夜はやさし」という店の名前はここのオーナー、高山虎之介さんの好きな小説家、F・スコット・フィッツジェラルドの小説「Tender is the Night」からとったものだ。フィッツジェラルドは『グレート・ギャツビー』（The Great Gatsby）という小説でその名が知られている。彼は男の中の男とよばれたアーネスト・ヘミングウェイと同時代の作家で、ジャズ・エイジの担い手であった。「Tender is the Night」はフィッツジェラルドの妻で精神病に倒れたゼルダ・セイヤーのイメージが投影されている小説である。

高山さんのパートナーが泰子さんの母違いの姉でジャズ歌手の坂口智子さんであることはすでに述べた。泰子さんは五人いる異母兄弟のなかでは、彼女よりひとまわりほど年上とはいえ一番年齢の近いこの姉とだけは何故か波長が合う。「子供の頃この姉から優しくしてもらった記憶は今でも忘れられない」といつも言っている。高山さんは智子さんより五歳ほど年上のはずだから、五十年かばぐらいになるのだろうか。

店の真ん中に半円形の八人がはいれるテーブル席があり、時計まわりに左から泰子さん、谷口、モハメッドと石野の四人がソファにすわり、日本語で話していた。そしてその右横にエリック、スーザン、私の順番ですわっていた。ステージが始まる前、高山さんが私達のテーブルにやってきて、テーブルの前の少し広い通路に置かれていた、足に滑車のついた移動スツールにすわった。顎髭をたくわえがっしりとした体格の彼は、虎之介というごっつい本名に似合わず繊細な神経の持ち主である。

『おや、今日はあたらしい方達もおいでのようなだ。ようこそいらっしやいました』と彼は英語で挨拶をした。

かなり日本語訛りがつよい英語だったが、あとでスーザンが彼の英語は非常に分かり易かったと言っていたので、多分ひとつひとつの単語の発音が正確なのだろう。それに以前通訳者をやっていたこともあり、彼の言葉の引き出しの多さにはびっくりさせられることが多い。

泰子さんが高山さんに新顔のモハメッド、エリックとスーザンを紹介した。

『今日はチェコからお客様をお迎えしていますのでお楽しみに』と高山さんが言った。

『えっ、どなたですか』とモハメッドがきいた。

高山さんはチェコからの賓客の名前を言ったのだが、私はうっかり聞き逃してしまった。

「あの大御所ですか」モハメッドが驚いていた。

「そうです。日本語がお上手ですね」と高山さんが言った。

「いえいえ」

（大御所？ 有名な男性歌手でもきているのか）と私はおもった。

智子さんも私達のテーブルにやってきて高山さんと入れ替えにすわり、高山さんは私の目の前に置かれていたスツールのほうへ移動した。高山さんのすわっていたスツールにすわる前に、智子さんは私の耳もとに「よかったね」とささやいた。今回はスーザンのときと違い私の身体に電撃ははしらなかった。

「小説を読ませていただきました」と高山さんが言った。

三月末締め切りのエンタテインメント系の長編小説新人賞に、昨年六月下旬から二月中旬にかけて書いた元禄赤穂事件を題材にした小説で応募した私は、高山さんにも原稿を渡し読んでもらっていたのであった。題名は「吉良義周の悲劇」にした。

「時代劇ですからおもったより時間がかかりました」私は高山さんの次の言葉にかなり期待をした。

「忠臣蔵で善悪が逆という発想や、吉良の孫でこの事件の最大の被害者である後継者の義周を主人公にしているのも悪くはなかった。よく調べているとおもいましたが、いかんせん義周のキャラクターづくりがまだ弱い。それに文章も明晰でよいがいかんせんビジネス文章を読んでいるようで……」

（そうかやはりだめか）私は高山さんの言葉に少なからずショックをうけてしまった。（私には才能がないのだ。会社をやめたのは失敗だったのかも知れない）

「他の友人達にも同じようなことを言われています」と私は言った。「小説と

しての情感がとぼしいって。小説は英語のばかりを読んで、日本語で読むのはビジネス書ばかりというのが悪いのでしょうか」

「そうかもしれませんね。高橋さんはもっと時代劇小説を読むといいのかもしれない」

（私が藤沢周平や池波正太郎のファンでもあることを彼は忘れたのだろうか）

「でも、あなたとはずいぶん意見をたたかわせた」私の顔をうかがっていた高山さんは話題を変えた。

「そうですね」

イギリスのオスカー・ワイルドの代表作『ドリアン・グレイの肖像』(The Picture of Dorian Gray)』では、人間の心の退廃がよく描かれており素晴らしい小説だと意見があったものの、アメリカのビート・ジェネレーションやヒッピー運動を好きになれない高山さんは、私の絶賛するジャック・ケルアックの『路上』(On the Road)』や私が卒論でとりあげた作家、リチャード・ブローティガンの『西瓜糖の日々』(In Watermelon Sugar)』では完全に意見を異にした。

『路上』は、少年院 (Reform school) 出身のヒーロー、ディーン・モリアーティらとともに、主人公サル・パラダイスが若さにまかせてアメリカ大陸を東から西へ、西から東へ、そしてメキシコへとヒッチハイクを中心に自動車で大移動した、路上放浪の旅をつづった小説で、バックパッカーの原点ともいえる。そういえば、少年の頃の私の夢は、自転車で日本中を走り回ることであった。

『エリックさん』と高山さんは言った。『雅は本が大好きなのです。私も本が好きなものですからよく彼とは語り合いました』

『私もスーザンも本好きです。モロッコのシャウエンからマラケシュまで彼と旅をした一週間ずっと三人で世界のいろいろな文学について語り明かしました』

『そうですか』

しばらく四人でエリックの好きなダン・シモンズの『ハイペリオン』(Hyperion)』からガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』(Cien Años de Soledad)』そして高山さんの好みで私の知らないロシア文学までいろいろな文学について語り合ったあと、高山さんはステージの準備のため智子さんに声をかけ一緒に去って行った。話しのなかでガルシア・マルケスも最近では衰えたね、というようなきつい話しもスーザンの口から飛び出した。でも、彼女が子供の頃からガルシア・マルケスの大ファンだったのを私は知っている。

『雅、素敵なところね』とスーザンが言った。

『ありがとう』と私は言った。

『雅、東京には屋台が少ないね』とエリックが言った。『何かアジアに来たと

いう気がまったくしない』

『……』

『私達はオーストラリアに住んでいるからタイ、香港、ベトナムなどアジアの国々にはよく行くのだけれど、アジアを旅する一番の魅力というのは、夜、屋外の屋台で飲んだり食べたりすることなのだ。私はあの雑然とした雰囲気が大好きだ。人間の生命エネルギーを実感できるからね』

『エル・フナ広場のあの熱気もよかったよね』

エリックはうなづいた。

『どうして東京には屋台がないの』スーザンが私の顔をみた。

『四十年前の東京オリンピックのとき外国からのお客様の目に見苦しいというので当局が禁止したのさ』

『人間の生命エネルギーを檻のなかに押し込めてどうするのだ』とエリックが言った。

『つまらないことをするよ』と私は答えた。『友人にロックバンドをやっている女性がいるんだけど、四十歳をこえても毎週日曜日には原宿の路上で歌っていたんだ。ところが去年周囲の迷惑になるという理由で警察が路上ライブを禁止してしまったんだ』

『周囲に人は住んでいるの』とスーザンがたずねた。

『いや。都市部の、それも周囲にはでかい公園やイベントを多くやる会場がある地域だ』

『日本の人達は何でもコントロールしたがるんだね』とエリックが言った。

『今度、土曜の早朝か、日曜の早朝に新宿・歌舞伎町に行ってみなよ。生ける屍達の群れに出会えるよ』

『どういうこと？』とスーザンが言った。

『規則規則でがんじがらめにしられた若者達が、唯一の捌け口である歌舞伎町のディスコに集まり、徹夜で踊り明かすんだ。始発電車に乗ろうと疲れきった身体にむちうって駅にむかってぞろぞろと歩いている彼らの姿は、生命エネルギーを吸いとらえたゾンビそのものだっていい』

『何か間違っているね』とエリックが言った。『若者達のエネルギーをネガティブなものからポジティブな方向にむかわせないとその国にとってもったいないよ』

私はだまっとうなづいた。

『スーザン、ひとつきいていい？』と私は言った。

『いいわよ』

『スーザンが看護婦になったのは、スーザン自身の夢？』

『そうよ。前にも話したように私が看護婦になるのは母の夢でもあったけれど、私自身の夢でなければ別の道を歩んでいるわ』

『そうか。よかった』

『何がよかったの？』

『いや、別に』

『おかしい人ね』

『ところで、雅、仕事はみつかった？』とエリックが言った。

『いいや、年齢ではねられて面接さえまならない』と私は答えた。

『働く場所を日本にかぎる必要はないんじゃないか』

自分のやりたい仕事をもとめて海外に移住したエリックにそう言われてしまうと私には返す言葉がなかった。

『スーザン、もうひとつひとつきいていい？』と私は言った。

『なーに。何でも答えてあげるわよ』

『京都に行くと言っていたのに、何故高野山に行ったの。日本の有名なスピリチャル・プレース（霊場）だから？』

『それは京都へ行く夜行バスの隣の席にすわった中学生の男の子に、『If you go to Kyoto, you had better go to Koya-san before going to Kyoto.（京都に行くのなら、京都に行く前に高野山に行くべきだ）』とつよく言われたからよ』

『had better~』

『そう言われたわ』スーザンは苦笑いしていた。

『じゃあ、高野山に行かざるを得ないね』

『それでモハメッドと知り合うことができたのだから、その男の子に感謝しなければならぬよ』エリックも笑っていた。

英語の『had better』は非常につよい言葉で、使い方によっては喧嘩になるのであるべくならつかわないほうがいい、と中学生の頃おしえられた記憶がある。場内が暗くなった。ステージが始まるのだ。

いつもはトリで歌う智子さんがトップバッターで歌った。どうやら高山さんの言ったとおり、今夜は特別な夜なのかもしれない。

谷口に誘われ谷口と泰子さんのアパートメントにゆくと、泰子さんに招待されたのか智子さんの姿をみることも多い。そのとき横目でちらちらとみるほど化粧もしていないジーパンスタイルの彼女は、清純な乙女のようなのだが、夜、歌手として、背中をあいたセクシーなドレスに身をつつむと、彼女は男をまどわすバンプに変身する。

（しかし私の好きになる女性のタイプは、スーザンといい智子さんといい何故自分の大切な友人のおもわれびとなのだ）

彼女の歌に酔いしれていると、私の横を『ごめんなさいね』とどここのアクセントともつかぬ英語で言つて、ひとりの老婦人が、太った三十歳なかばぐらいの女性を連れて、ステージのそばの席まで歩いていった。そこはそれまで「予約席」と書かれていた席だ。

この外国からきたらしい老婦人はこのオーナーである高山さんの特別な知り合いかな、と私はおもった。連れの太った女性は彼女の子供なのだろう。

智子さんのステージが終わると、ミュージシャンが日本人から外国人のカルテットにかわり、ピアノ、ドラムス、コントラバス、サククスによるボーカルなしの演奏が始まった。

私はジャズに詳しくないのでどんな曲が演奏されているのかはわからないが、流れるようでいて、一瞬よどむようなリズムが日本人のそれとは違っている。

私はどれくらい人がはいつているのかと客席の後方にある入り口をみていたら、客席からいつせいに「うお」という声があがった。ステージのほうをふりかえると、

何と、あの老婦人が歌い始めたではないか。

(モハメッドが大御所と言うから、男性だとばかりおもっていた)

歌は決して上手くない。チェコ人である老婦人から発せられる英語のリズムはアメリカのジャズ歌手のそれとは違っている。なれない外国語で無理に歌っているようでもある。

しかし、存在感がまったく違うのだ。

彼女の歌う英語の歌詞は、ひとつひとつに重みがある。言葉のひとつひとつが、心地よい刃(やいば)となって、私の耳にはいつてくる。

特に最後に歌った曲で彼女がリフレインしていたフレーズは耳のなかに残った。

— A man cannot understand a woman because we are mysterious butterflies. (男は女を理解することはできない。だって私達は神秘の蝶だから)

彼女のステージが終わった。

五曲は歌ったはずだから、MCの部分も含めて三十分以上たっているはずだが、あつというまだった、という気がしてならない。

泰子さんが私のそばにきてバー・スペースへ誘った。

バー・スペースとはステージに隣接している十二畳ほどの大きさのほぼ正方形のスタンディング・バーのことである。カウンター席の他には、立ったままでも、そばにあるスツールにすわっても飲めるように、背の高い円形の小さなテーブルが三つおいてある。

「今日、谷口機嫌が悪かった？」



「少しね。そうそう、あの件は気がきかなくてごめんね」

「それはいいのだけれど。で、何か言っていた」

『私のなかでは解決のすんでいる問題だ』と言っていた」

「そう？」

「……」

私の目をしばらくみていた泰子さんが口を開いた。

「今日、大阪からもどつてくると荒れたのよ。『今さらそのことを持ち出すなんてどういうことだ』って。あんなに荒れた谷口をみたのは、本当に久し振りであったわ。『ミステリー小説の翻訳者になることはあきらめた』と話してくれたときのあのひとは、もっと静かで、恐ろしいくらいに落ち着いていた」

「本人のなかでは押さえつけてきたことだからじゃないのか」

「……」

「それとプライドの高いやつだから、私をとおしてきくより直接言ってほしかったんだろう」

「私もそれが一番だとおもう。失敗だったわ」

「そうだね」

「スーザンのことだけれど、オーストラリアにもどったら今までのような大きな総合病院ではなく、配属で自分の希望をきいてもらえる産婦人科専門病院で働きたいと言っていたわ」

「そう？ そのほうが彼女のためだね」

「……」

「……」

「それより話したかったのは、私達海外に移住するかもしれないということ」

「……」

「私の仕事は、雅さんも知っているように、顧客は海外が中心なのね。だから日本に本社をおいておく必要もないの。それに、これから小学校にあがる子供の教育のこともあるし……」

「そうか。谷口も『これからは夢を追って日本から海外に飛び出してゆく人が多くなる』と言っていた」

「雅さんはどうする」

「どうもこうもない。私にはあなたほどの才能がない。それにまだ日本でやり残したことがあるし」

「わかったわ」

泰子さんは席にもどっていった。

（日本でやり残したことがある？ そんなことより日本から外に出るのがこわいだけじゃないのか）

二回目のステージが始まるまでまだ間がある。私はバー・カウンターでビールを注文し、今日買ったばかりの本、マイケル・ルイスの『マネーボール (Moneyball)』を読み始めた。この本はMLBの強豪、オークランド・アスレチックスの敏腕GM、ビルリー・ビーンの「いかに金をかけないで、いかに多く勝つか」という経営哲学を書いた本だ。

肩を誰かにたたかれた。いつのまにかそばにきていたモハメッドである。

「また本を読んでいるのですか」

「読書は私の生き甲斐だ」

モハメッドは軽く笑った。

『アホでマヌケなアメリカ白人』は読み終わったの」

「英語が難しいので、ちょっと放り出している。でも、ポール・オースターの『リヴァイアサン』はもう三分の一まで読みすすめているよ。最初は取っ付きにくいかなと感じた彼の小説だけれど、文体になれてくると文章もおもったより平易でとにかく面白い」

「雅のその軽さがいいね。今難しいものは、いつかまた挑戦すればいいのだから」

私は照れくさかった。

「ホームページを読ませてもらったよ」とモハメッドは言った。『英語がしゃべれない英文科の学生なんて、ビジネスの世界ではまったく存在価値がないのだよ』ってひどい言葉だね。雅には何くそという反発心があったからよかったけれど、ああいうひと言に人生を潰されてしまった人達は大勢いるかもしれない。われわれ大人は言葉に気をつけねばならないと本当におもう」

「そうだね」私はニートや引きこもりの若者のことをふとおもった。「でも、それで人生を潰されてしまつては、あまりにひ弱すぎるよ」

「人って、結構ひ弱な生き物なのだよ。人間の自由な心って捕われやすく、本当に傷つきやすい…」

「……」

モハメッドは私の顔をみつめると言った。

「雅ももう少し他人のことをわかってあげないと…」

「わかった」

「しかし、何かあの面接官を怒らせるようなことを言ったわけではないのしように」

「言っていないよ。彼が私を面接するときにはしゃべった英語が純粋にわからなか

っただけだよ。彼はあの最後の言葉以外はすべて私に英語で質問してきたんだ」

「だったら本当にひどいね」

「でも今では感謝している」

モハメッドはフツと笑うと言った。

「雅にあの反発心があるかぎりいつかまたいいことがあるよ」

「あのときと同じ反発心はあるけれど、当時のしなやかさ、と言おうか心の柔軟性はかなり失われてしまったかもしれない」

「それは仕方がないよ。年齢とともに錆びてゆくものはあるのだから」

「……」

「ところで雅、私の友人で英語のしゃべれるセールスパーソンを探している人がいるけれど、会ってみるかい」

「ぜひ会ってみたい」

「わかった。彼と連絡をとってみる」

「ありがとう」

「決してあきらめちゃいけないよ」

「わかっている」

「……」

「モハメッド、どうして日本的なものに興味があるの」

「義父が日本の神仏習合、自然崇拜のよさについてよく語っていたから。それに義父も言っていたけれど、これからは異なった宗教と民族がこの狭い地球のうえでともに生きて行かなければならないのだから、他の考え方を知るというのが重要になるんだ」

「宗教のことだけれど、お義父さんの言うことを信じているの」

「私はムスリムだよ。アラーの存在を一度として疑ったことはない。そういう考えもあるのだな、と理解している」

「……」

「話しはかわるけれど、『ミステリアス・バタフライ (Mysterious Butterfly)』はいい歌でしょう。彼女はチェコのジャズ界の重鎮です。日本で彼女の歌をきけるなんて素晴らしい」

「いい歌だよ。特に彼女がリフレインしたフレーズは素敵だった。でも……」

「でも？」

「でも、モハメッドは神秘の蝶って…、女性のことだとおもう？」

「雅はそうおもわないの」

「女性はたしかに男にとって神秘的なものだとはおもうけれど、神秘の蝶と言

われてしまうと、何か違うなと感じるんだ。女性は私達と同じ人間だよ」

「……」

「それは人ではなく、形のないものというか、もっと奥が深いものだとおもうんだ」

「雅は何だとおもうの」

「生きる意味というか……」

「生きる意味？」

「いや、まだつかみきれていない。それは一生わからないものかもしれない」

モハメッドは微笑んだ。深い微笑みだった。

（ゲルニカにゆきたい！）

不意にそんなおもいが、私の心のなかにつよく湧き上がってきた。町の高台にある、あの静謐で、想像力を刺激させてくれる場所にもう一度浸って、自分の考え方をたたき直したくなったのだ。

（あそこには、たしかに、野性の息吹が満ち溢れていた）

私の耳に、幼子（おさなご）の話すバスコ語がきこえてきた。

まだ二回目のステージまで少し時間があるときいた私は、階段をあがり外にでてみた。

「神秘の蝶」といえば、この一作で消えてしまったのかその後名前をきかないが、十年ほど前に南米のある作家の印象的な短編小説を初めて読んだときの気持ち、私は忘れることができない。その作家の名前はギジェルモ・アジャラという。短編のタイトルは「Buscando una mariposa misteriosa（神秘の蝶をさがして）」であった。メキシコのティファナの書店で表紙が美しかったので買い求めたのだが、非常に平易なスペイン語で書かれていたため、私でも読みとおすことができた。

私はこの短編が気に入り、昨年の長期旅行にその短編のはいった短編小説集を持ってゆき好きな箇所を何度も読み返した。

この物語はあるペルーの若者ふたりが伝説の神秘の蝶をもとめてアマゾンの奥地にはいるところから始まる。

ひとりが鬱蒼とした熱帯雨林のなかで美しい蝶の捕獲に成功するものの、眼下にアマゾンの支流が広がる崖の上で合流した彼らは、その蝶を放すか檻にいられて持ち帰るかで争いになり、殴り合いのさなか蝶を放つことを主張した若者が足を滑らして谷底に落ちてしまう。蝶を檻にいれて持ち帰るのを主張した若者の名をギジェルモといい、蝶を放つことを主張した若者の名をエンリケという。

ギジェルモは三日三晩必死になってエンリケを探しまわったが、エンリケを

発見することはできなかった。ギジェルモはある日の夕方、ふたりが争った場所にもどると蝶を檻からだし大空に放った。そして大声をあげて泣いた。

探索に疲れきったギジェルモがその夜丸太のようにぐっすり眠っていると、夢枕にエンリケがたった。エンリケの肩には放ったはずの蝶がとまっていた。エンリケはある小屋の前にたっていた。ギジェルモはその小屋に見覚えがあった。

翌朝、ギジェルモがその小屋に行くと床にエンリケが寝ていて、これから美しい女に変身しようかという少女と彼女の弟らしい男の子のふたりがつきそっていた。ギジェルモがエンリケのそばにすわるとうしろにいるはずのふたりの気配がしない。ギジェルモが振り返ると美しい蝶が一頭、灰色の蝶が一頭飛んでいた。

二頭の蝶は小屋の外にでた。陽光をあびると美しかった蝶は色が少しくすんだようにみえたが、暗い小屋のなかでは灰色にみえた蝶が紫にかがやきはじめた。

（何と神々しい）ギジェルモは心のなかで叫んでいた。

エンリケのよぶ声に、ギジェルモは目覚めた。

気がつくとは今度は逆にエンリケが、床に横たわっているギジェルモを介抱していた。

「¿Que pasa? (何が起ったの)」

「El Dios salvó tu vida. (神がおまえの命を助けたんだよ)」

うなづいたギジェルモはまた深いねむりにおちた。

翌朝、ギジェルモはエンリケとともに来た道をもどろうとしたが、ギジェルモにはどこをどう行けば自分達の住んでいる村があるのかわからなかった。しかし、エンリケはギジェルモに「No problema. (まかせといて)」と言ってすたすたと前を歩いてゆく。

ふたりは村に着いた。

村に着いたとたん、エンリケが倒れた。そして帰らぬ人となった。

エンリケの最期の言葉は、

「蝶をつかまえたのは僕だよ。生きて帰れるわけがないじゃないか」  
だった。

この小説にどんな寓意があるのだろうか、私にはまだ理解できていない。スーザンの言うとおり「みつけても決して獲ってはならないものがある」ということだろうか。

それでも、人には追いかけるなければならないものがある。心のうちに秘めた野性を決して失ってはならないのだ。

エリックはやりたいたいことがあるからということで、移民までした。私にはもの凄い決断だったようにおもえるが、そのことに話しをむけてみると彼は意外と淡々としていた。

スーザンは好きな人を追いかけて、エリックが人生をかけている国に移民してきた。

モハメッドは日本的なものに随分興味と理解があるようだ。しかしムスリムとしての矜持を忘れてはいない。

谷口は海外にペンションをオープンしたいと言っていたことがある。泰子さんは子供の教育のことで心を砕いている。そのためには海外にでることを恐れてはいない。

（いったいおまえは何がしたいのだ！）

「高橋、ステージが始まるぞ」

谷口の声がきこえた。

「わかった」

（まあいい。このことは明日ゆっくり考えよう）

私は空を見上げた。夜空に何かが動いたようにもおもえた。